ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第98号

川から出てきた石剣 ---------- 中川　和哉 -- 1
奈具岡遺跡再整理報告(3)―軟質緑色凝灰岩製管玉製作について― ----- 望月　誠子 -- 7
小山　雅人
平成17年度発掘調査略報 ---------- 15
2．上安久城跡
3．園部城跡
4．宮津城跡第12次
5．諸畑遺跡第4次
6．長岡京跡右京第856次・友岡遺跡
府内遺跡紹介　104．湧田山1号墳 ---------- 25
長岡京調査だより・94 ---------- 27
第102回埋蔵文化財セミナー ---------- 29
センター設立25周年記念特別展をふりかえって ---------- 33
センターの動向 ---------- 35

2005年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

川から出てきた石剣

中川　和哉

はじめに

京都府の地勢は、北部は海に面し、中部は山が多く、南部は比較的大きな盆地や平野部が広がる。これらの地域は、律令期にはそれぞれ丹後・丹波・山城と言う国名が付けられている。丹波地域は前述したように山地となっており、日本海側と太平洋側を隔てる分水嶺となっている。この山塊を源に日本海に注ぐ大型河川に由良川がある。由良川は140km余りを流れ若狭湾に注ぐ。その途中に綾部盆地、福知山盆地を貫くが、河口部には大きな平野は形成されない。また、この水系上流部は、日本列島において最も低い分水嶺(標高95m)を兵庫県内で形成していることから、瀬戸内海側と日本海側の交通の要衝となっていた。一方、現在もサケが遡上する川として知られており、江戸時代には盛んに捕獲されたようすが文献にも残されている。

今回紹介する資料は、由良川下流域の河床に広がる地頭(じとう)遺跡(京都府舞鶴市地頭所在)の周辺から採集された磨製石剣類である。資料は現在、舞鶴市資料館で保管、展示されている。今回、これらの資料紹介の機会を与えていただいた舞鶴市教育委員会には記してお礼申し上げます。

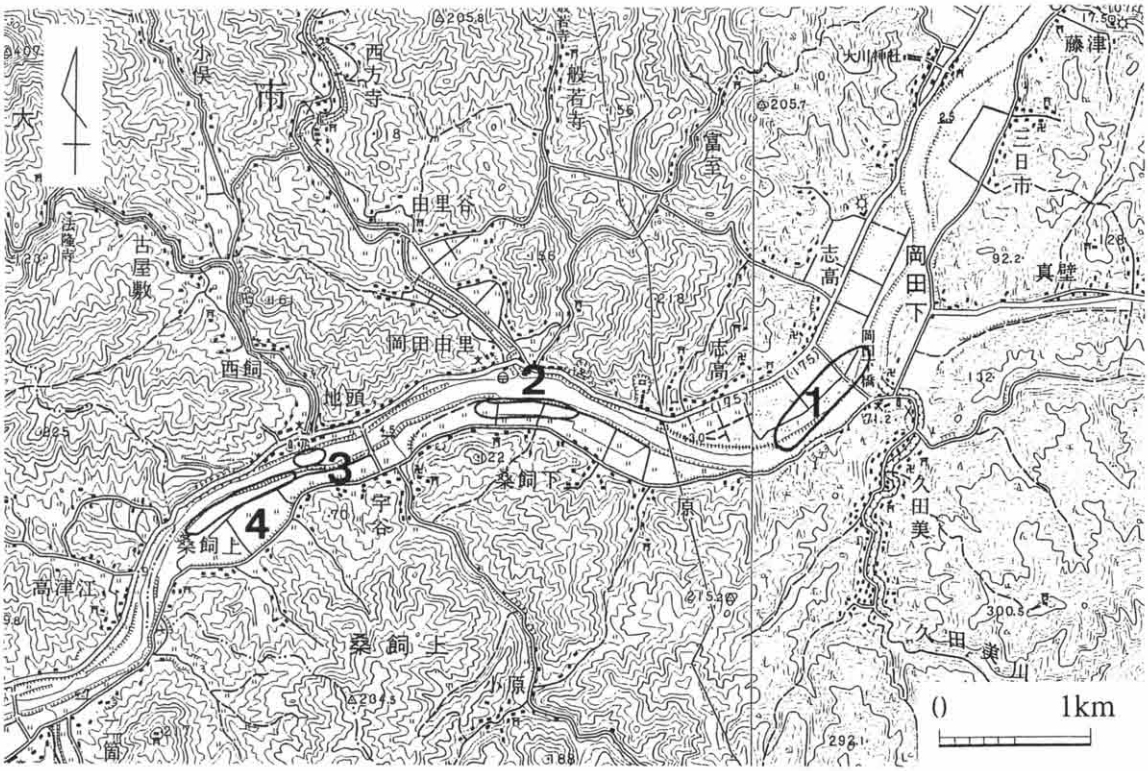
1．採集された石剣

1は所謂鉄剣形石剣(以下、鉄剣形石剣)で、表裏両面に鎬があり、先端部から基部まで続く。全体に磨滅しており、水磨によるものと考えられる。粘板岩を素材に用い、色調は黒灰色で、石質は緻密である。着柄したものではなく、直接または蔓などを巻いて剣把に利用したと考えられる。また、先端部近くの片面には黒色の付着物が認められ、さやなどの痕跡の可能性も指摘できる。剣把部の刃つぶし加工は約7.5cm、全長21.5cm、最大幅3.5cmを測る。

2は鉄剣形石剣で、表裏両面に鎬があり、切っ先から基部まで続く。全体に磨滅しており、水磨によるものと考えられ。石質が緻密な粘板岩を素材に用い、色調は灰色であるが鉄分の沈着によると考えられる褐色を帯びた部分が認められる。剣把部の刃つぶし加工は約7.3cm、全長20.4cm、最大幅3.1cmを測る。

3は鉄剣形石剣で、全体に磨滅が及んでいるため刃部では鎬があったものと想定できる。表面は、鉄分の沈着のため茶褐色を呈しているが、新しい欠損部の観察では灰色を呈している。石材は硅質の強い密な粘板岩と考えられる。剣把部の刃つぶし加工は約6.3cm、全長16.5cm、最大幅3cmを測る。

4は鉄剣形石剣で、表裏両面に鎬があり、刃部にのみ認められる。全体に磨滅しており、水磨



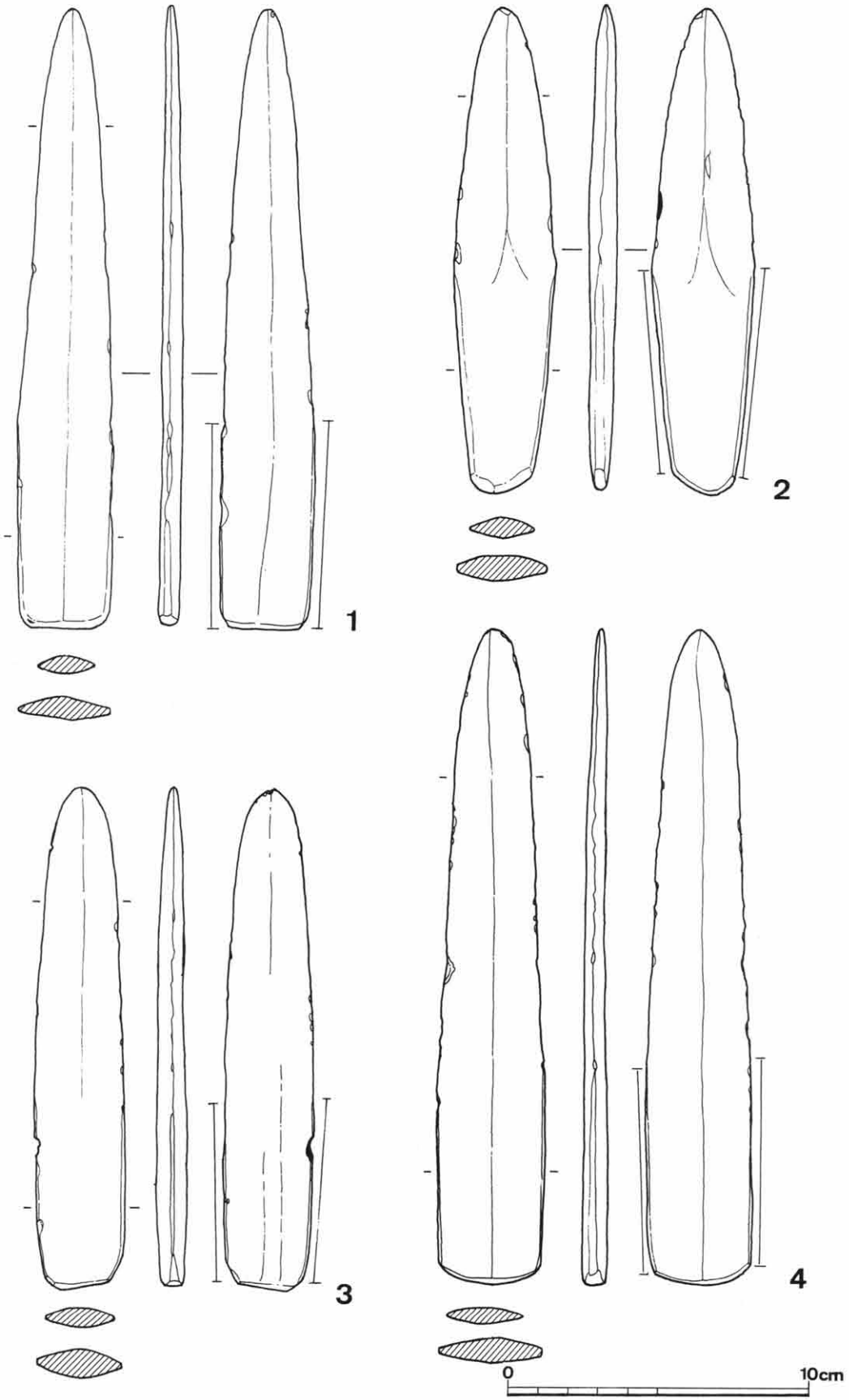
第１図　主要遺跡分布図(国土地理院1/50,000大江山・舞鶴)
１．志高遺跡　　２．桑飼下遺跡　　３．地頭遺跡　　４．桑飼上遺跡

によるものと考えられ。石質が緻密な粘板岩を素材に用い、色調は鉄分の沈着により暗茶灰色を呈する。剣把部分は他の石剣の両側がほぼ平行であるのに比べ、基部へ向かい幅が狭くなる。剣把部の刃つぶし加工は約7.2cm、全長15.9cm、最大幅3.4cmを測る。

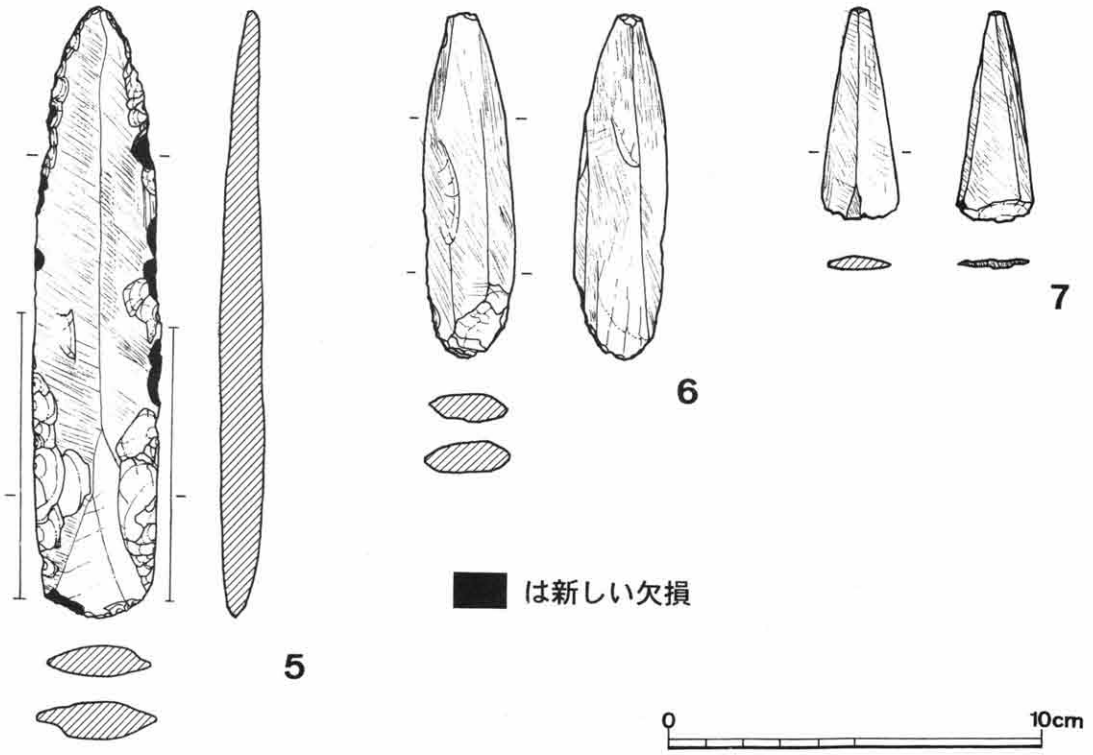
５は磨製の鉄剣形石剣であるが剥離痕が器表面に残されている。石器の素材はサヌカイトで、白色の微小な斑晶を含む黒灰色の石基を持つ。全体的の磨滅が激しく、新しい欠損が多く認められる。器表面に残された剥離痕から見ると、基部側には素材剥片時の剥離痕が残されていることから、剥片を素材として加撃による整形加工によって形が整えられた後に研磨によって刃部と鎬が形成される。切っ先近くの剥離痕は研磨後のものと考えられることから刃部をさらに加工したこともわかる。また、剣把側には刃部形成の研磨加工が及んでいない部分があるがこの両側に対しては、研磨による刃つぶし加工が認められる。剣把部の刃つぶし加工は約８cm、全長16.2cm、最大幅3.4cmを測る。

６は尖頭部と両側に刃部を持つ石器である。先端部は欠損しており基部側には加工痕が残されている。研磨痕は非常に粗く、上述の石剣の研磨痕とは明らかに異なる。研磨具の肌理が粗粒であったと考えられる。両側には刃つぶし加工は認められない。加工途中の未完成品または再利用加工の途中の生成物と考えられる。素材石材は、暗灰色の粘板岩である。全長9.2cm、最大幅2.4cmを測る。

７は磨製石鏃の未完成品と考えられる。先端部は一見欠損しているように見えるが、研磨痕が残されている加工面である。基部側には器表面の研磨痕よりも新しい大きな欠損面が認められ、



第２図　地頭遺跡および周辺出土の石剣



第３図　地頭遺跡および周辺出土の石器

この面に対して直行するように面取りの研磨加工が成されている。この面取り加工は非常に深く粗い研磨痕が残されており他の面との研磨具の違いを表しているものと考えられる。破損以後の研磨であることから、本来は磨製石剣の先端部であったものが、再利用されて石鏃に加工されていく途中の生成物と考えられる。磨製石剣は破損などにより再加工され、他の器種にされることは指摘されているところである（野島ほか2004）。石材には黒色の粘板岩が用いられている。全長5.6cm、最大幅2.1cmを測る。

２．採集地周辺の遺跡および出土石剣

地頭遺跡（京都府教育委員会編2001）周辺には多くの遺跡が点在している。この地域では川の勾配がゆるく、河口に近いことからしばしば洪水に襲われる。河口部に近い洪水は大きな礫を伴うものではなく砂や粘土を削り込んで再堆積し、水位もゆっくりと上昇する。これらの遺跡は、一帯に平野部が少ないため、由良川の形成した小規模な自然堤防上に集落が営まれることが多い。自然堤防上に生活した痕跡の最も古い事例は、志高（しだか）遺跡（肥後・三好ほか1989）で縄文時代早期の縄文土器である。由良川右岸では、縄文時代後期の集落として知られている桑飼下（くわがいしも）遺跡（渡辺ほか1975）が発掘調査されている。この遺跡では石鍬と呼ばれる打製の石斧状の石器が多数発見されており、その使用痕から土掘り道具と考えられており、根菜類の採取あるいは栽培を示すものとして注目されている。

また、周辺の弥生時代遺跡には、同じ由良川左岸下流の志高遺跡、右岸上流の桑飼上（くわがいかみ）遺跡（細川・岸岡ほか1993）がある。志高遺跡は、弥生時代前期後葉から利用されている遺跡で弥生時代

全期間に渡りほぼ途切れることなく集落が営まれている。集落内には、住居域と墓域が認められる。志高遺跡の最盛期は弥生時代中期中葉であり、銅剣形石剣が埋められた年代もこの時期に当たる。また、墓としては従前の方形周溝墓のほか、一辺15.5mを計る方形の貼石墓が検出されている。この遺跡からは23点の磨製石剣が発見されており、そのうち7点が銅剣形石剣、16点が鉄剣形石剣である。打製石剣の基部の可能性のあるものが2点存在している。

地頭遺跡対岸の桑飼上遺跡では、弥生時代中期中葉から後期にかけての集落遺跡が発掘調査されている。この遺跡からも粘板岩製の磨製石剣が1点出土している。このほかに磨製石鏃が3点出土している。

3．小　結

由良川下流域の大型の集落遺跡は、川の攻撃面対岸に形成された自然堤防と後背湿地から成り立っている。志高遺跡や桑飼上遺跡などがあたる。地頭遺跡は、現在の川の流れでは攻撃面側と考えられ大規模な集落の可能性は低いが、弥生時代の旧地形の検討などが必要である。

いずれにしてもここで紹介した石剣は水の作用によって磨滅しており、原位置からの移動が考えられる。狭い谷部を流れ、流れの遅い由良川下流域では、長時間の降雨により谷幅いっぱいまで水かさが増すことはめずらしくない。それゆえ自然堤防を越えて洪水が起き、遺跡を削り包含されていた遺物を押し流したことも想像に難くない。これらの遺物は、対岸の桑飼上遺跡や発見地の地頭遺跡にあったものと考えられるが、地頭遺跡については発掘調査が行われていないため詳細はわからない。

紹介した磨製石剣は、完形率が高いことからこれまでも注目を浴びてきた、また、発見された石剣がすべて磨製石剣であることも注目に値する。

周辺における磨製武器のあり方を見ていきたい。拙稿で鉄剣形磨製石剣と打製石剣は、機能が同じであると論証した。志高遺跡では前述したように16点の鉄剣形磨製石剣と2点の打製石剣の可能性のあるものがある。約90％が磨製石剣である。同様に石鏃を比べると打製が48点、磨製が9点で、磨製が約16％を占めている。桑飼上遺跡では磨製石剣のみしか出土しておらず、石鏃は打製24点、磨製3点で、磨製は約11％を占めている。

由良川中流域の綾部盆地では、興(おき)遺跡(田代1992)、興(おき)・観音寺(かんのんじ)遺跡(崎山1995)、青野(あおの)遺跡(鈴木ほか1976、小山・増田1986、引原・森下1988)、青野南(あおのみなみ)遺跡(綾部市教育委員会1982)で14点の磨製石剣が出土しており、そのうち1点が銅剣形であとは鉄剣形である。このように、由良川流域における大きな特色として、打製石剣がほとんどないか、あっても10％程度であること、また石材は、粘板岩が大半を占めていることがあげられる。このような傾向は、隣接する丹波地域の桂川水系の遺跡と同様であるが、志高遺跡や桑飼上遺跡などの由良川下流域の遺跡では、石庖丁がほとんど出土しない。調査担当者は木庖丁などの存在を想定している。しかし、桂川水系の遺跡においては高い頻度で粘板岩製の石庖丁が出土する。石材環境に起因する差であるのか、生業の違いによるものか今後の課題として残される。また、丹後半島の弥生時代中期の遺跡である加

悦町日吉ヶ丘遺跡(加藤2005)では数は少ないが打製石剣２点のみが石剣として発見されており、打製石鏃と磨製石鏃の数は96点の内約３％が磨製石鏃である。また、中期の豊谷遺跡の第１号墳主体部からは22点の打製石鏃と遺構検出時に打製石剣が出土している。可能性のある一部の細片を除けば打製石剣がほとんどない由良川流域の遺跡との違いが出るのか今後の調査事例を注意深く追っていく必要がある。

（なかがわ・かずや＝当センター調査第２課調査第２係主任調査員）

参考文献

綾部市教育委員会　1982「青野南遺跡発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第９集　綾部市教育委員会

加藤晴彦ほか　2005『日吉ヶ丘遺跡』　加悦町教育委員会

岸岡貴英・細川康晴ほか　1993『京都府遺跡調査報告書』第19冊(桑飼上遺跡)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府教育委員会編　2001『京都府遺跡地図〔第３版〕』第１分冊　京都府教育委員会

小山雅人・増田孝彦　1983「青野遺跡第６・７次発掘調査概要」」『京都府遺跡調査概報』第６冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

崎山正人　1995(『興・観音寺遺跡』福知山市文化財調査報告書第29冊)　福知山市教育委員会

引原茂治・森下衛　1988「青野遺跡第11・13次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第30冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

鈴木忠司ほか　1976(『青野遺跡Ａ地点発掘調査報告書』綾部市文化財調査報告２)　綾部市教育委員会

田代弘　1992「観音寺遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第17冊(近畿自動車道敦賀線関係遺跡(８次区間))　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

野島永ほか　2004『京都府遺跡調査報告書』第36冊(市田斉当坊遺跡)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

肥後弘幸・三好博喜ほか　1989『京都府遺跡調査報告書』第12冊(志高遺跡)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

渡辺誠ほか　1975『桑飼下遺跡発掘調査報告書』　舞鶴市教育委員会

奈具岡遺跡再整理報告(3)
—軟質緑色凝灰岩製管玉製作について—

望月　誠子・小山　雅人

はじめに

平成15年度に当調査研究センターが実施した奈具岡遺跡第4次および第7・8次調査出土の玉作り関係遺物の総括整理の成果については、すでに同遺跡再整理報告(1)、同(2)として報告してきた。第3回目となる本稿では、第4次調査出土資料を中心として、軟質緑色凝灰岩製管玉製作について報告する。

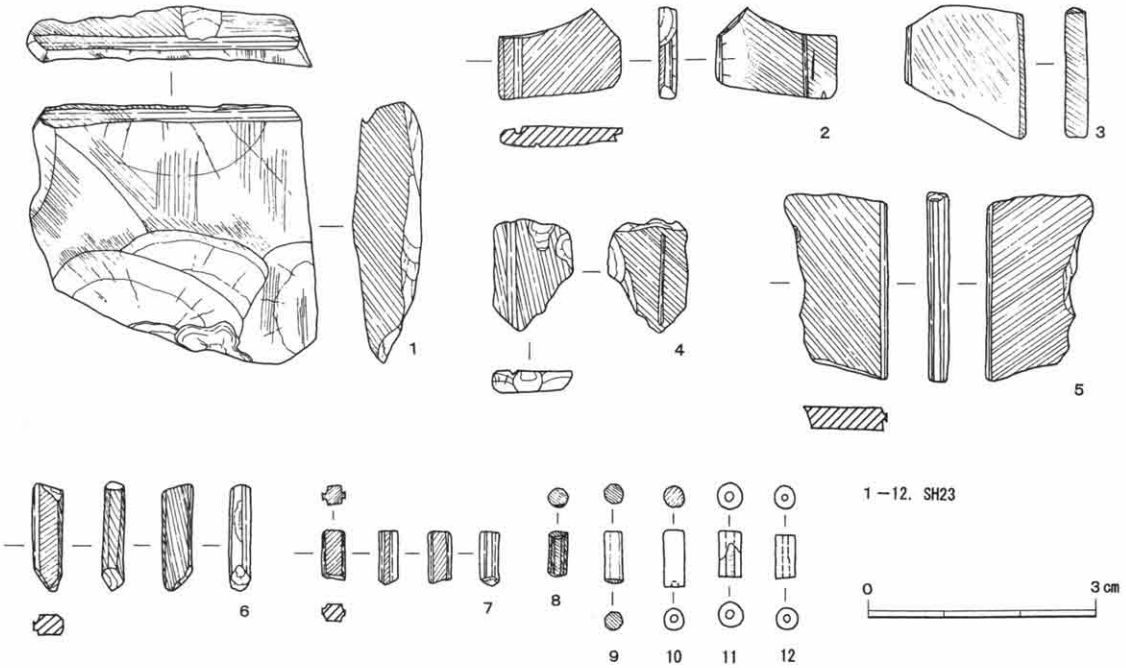
奈具岡遺跡の再整理にあたっては、第4次調査分を中心に多量の管玉および管玉未成品を確認した。この管玉製作に関わる資料は多量であり、素材により製作技法が異なることから、一括せず素材別に報告することにしたい。本稿ではまず、軟質緑色凝灰岩製の管玉製作について注目し、その様相を述べることにする。

1．出土点数および出土遺構(付表)

再整理された軟質緑色凝灰岩製の管玉および管玉未成品は、第4次調査図版掲載分がNo.48～110に35点、残余分No.813～1603の791点の計826点、第7・8次調査図版掲載分No.500・502の2点、残余分No.889～916、No.1034～1054の51点の計53点を数える[注1]。なお、この中には既報告資料も混在している。

第4次調査ではSH02・06・07・10・11・14・15・20～23、T-1道状遺構、SK01・06から出土が見られる。このうちSH07は田代・増田1993の本文において玉作関連の資料の出土はないとされていたが、同概報の付表によれば第31図10の遺物がSH07から出土しており、遺物に同封されたラベルからもこれが確認された[注2]。また、田代・増田1993によりすでに指摘されているように、遺構による出土量には大きな差があり、特に資料数が多く工程的にも最終工程までの資料がそろう遺構は、SH14・15・23に限られる。

第7・8次調査は水晶製玉作が注目されたように、軟質緑色凝灰岩製の資料は出土点数も少量であるが、出土遺構の数は第4次調査とそれほど変わらない。SH01・17・20・34・39・46・52・53・56・57・64というかなり広い範囲から出土している[注3]が、ただし、穿孔された未成品や完成品(管玉)はほとんどなく、小破片が半数を占める。痕跡が残るもの見る限り、第4次調査の整理報告で復原された製作技法と同様の製作技法[注4]が用いられていると判断した。以下では主に第4次調査により出土した資料を元に考察し、特にことわりのない場合は第4次調査の資料をさすこととする。



第１図　軟質緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図

２．製作手順の復原および技法の問題

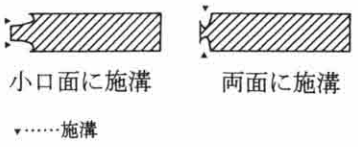
奈具岡遺跡の管玉製作資料については田代・増田1993で述べられているところであるが、ここで新たな資料を含め再考したい。

(1)荒割

原石から自然面を取り除き、適当な大きさに分割する。打割のみのことが多いが、施溝分割することもある。

(2)板状素材の作成

施溝分割により、板状素材(田代・増田1993でいう「板状剥片」)を得る(第１図１)。後の作業を考慮して、石材から広い面を得るように施溝し、管玉１個分の厚みを想定して分割する。分割した素材が厚い場合、さらに小口面に施溝を行い薄く分割する。出土した板状素材を観察すると、小口面の両長辺に施溝があるものも多く、石核から効率的に施溝分割していたと考えられる。こうした小口面両長辺に平行する２条の施溝がある資料は、両面から施溝されたようにも見えるが、施溝の向きを観察することで両面からの施溝か否かは判断できる(第２図)。



第２図　板状剥片への施溝
(断面模式図)

分割後はすぐに板状素材の両面を研磨する。ここで管玉の径に近い厚さ２～３㎜の素材となる。両面研磨が終わると、管玉の側面や端面となりうる板状素材の側面が研磨されることも多いが、ほとんどが両面研磨後に行っている(付表、第１図２・３)。

(3)四角柱体の作成

両面研磨後、管玉１個分の径を想定してまず片面から施溝する。このとき、施溝の深さは板状

素材の厚みの半分程度にとどめている。続いて裏面からも同様に施溝を行うが、ここで文字通りに擦切ることはない。これは両面から施溝をしながらも、施溝の底が接する前に施溝を中止した資料の存在から推定される(第１図４・５)。また、分割された四角柱体に残された施溝痕が、施溝の底でも接することはなく、２条の施溝痕の間にわずかながら面が存在する(第１図６)ことからも確実であろう。

残存する資料には、片面または両面に未分割の施溝が多数並ぶものはない。したがって、一度に多数の施溝をして一気に分割するのではなく、両面からの施溝をしては分割し、次の分の施溝に移るという状態で次々に多角柱体を作出していったと考えられる。

なお、四角柱体や多角柱体が作ろうとする管玉に比べ長い場合は、長軸に直交して切断し長さを調整している。奈具岡遺跡の資料には、西川津遺跡に見られるような非常に長い棒状材は存在しない。多角柱体の長さは完形で最長14.1㎜、破片でも最長13.9㎜である。一方、穿孔済の完形未成品および管玉の長さは5.4～15.0㎜である。軟質緑色凝灰岩は素材の性質上、細長い四角柱体や多角柱体が折損したという可能性もある。ただ、板状素材も両面研磨されたものでは長さ20㎜以下のものが多い。残存する資料で考える限り、奈具岡遺跡では管玉１個ないし２個分の製作をする長さの多角柱体を製作していたと考えられる。

(4)多角柱体の作成・全面研磨

板状素材から分割された四角柱体は、両面研磨によりすでに一対の側面は研磨されているため、ここでは残りの部分を研磨する。主に施溝痕の研磨により面を作り、必要に応じてさらに面を追加して行く。このとき、各面の研磨痕は長軸に対して右上がりまたは左上がりのものがほとんどである。また、円柱に近付けつつも明確に面が形成されていることからも、砥面が「U」字状になったいわゆる玉砥石の使用を考えるのは難しい。この２点から全面研磨の段階までは、研磨に平砥石を使用していたことは確実であろう。

実際の資料では11角柱まで確認しているが、大体５～８角柱くらいを目安に側面の研磨を一旦中止する。全側面が研磨された時点で端面が未研磨のものも多いようで、全面が研磨されるのは基本的に多角柱体の段階と考えられる。ただし、ここで研磨痕が残らない程度にまで研磨を進めることはない。こうして多角柱体の全面研磨がされるといよいよ穿孔となる。

(5)穿孔

今回の再整理中では、56点(うち１点は第７・８次調査)の資料に穿孔痕が見られた。穿孔された未成品および完成品(管玉)の孔内を観察すると、明瞭な回転研磨痕が密に見られ、孔の縦断面は極端な円錐状には見えず円柱状に穿孔が進むと考えられる。破損した資料からも、孔は穿孔後ほぼ円柱状になり、孔内には回転研磨痕が密に見られることが確認された。このことからも、管玉の穿孔は磨製石針で行われていたと考えられる（冨山正明1997)。穿孔まで行なっているＳＨ14・15・22・23では磨製石針も出土し、特にＳＨ15・23では多量に出土している。奈具岡遺跡出土の磨製石針については別稿を用意しているが、未成品や管玉に残された痕跡とその共伴出土状況から、当遺跡で出土した多量の磨製石針が穿孔に使用されていたことは確実であろう。また、

完形資料は両端面に穿孔痕や、孔内に穿孔のくいちがいが観察されることから、両面穿孔が基本であったと考えられる。

(6)最終研磨

研磨痕を残さずに磨きあげる研磨を最終研磨とし、最終研磨が完了したものを完成品(管玉)とする。孔が貫通し穿孔が終了した未成品は、最終研磨を経て多角柱から円柱となり、両端面も研磨しきれば完成品となる。長さ15㎜、径７㎜の管玉もあるが、ほかは長さ5.4～8.7㎜、径1.5～3.2㎜である。長さ6.6㎜、径2.7㎜程度の管玉を目指していたようだ。

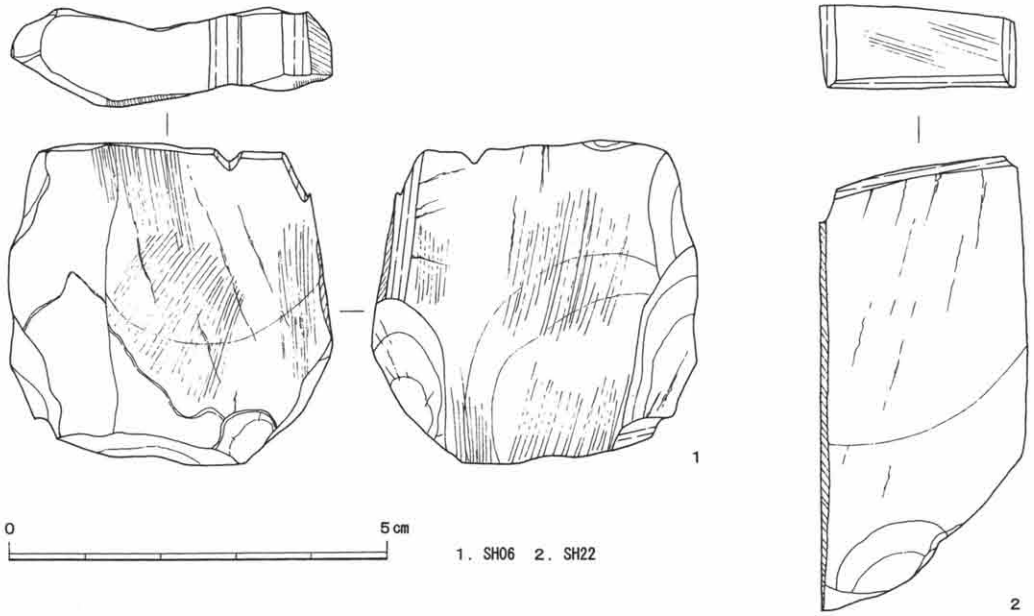
以上が既報告を含めた資料の観察から復原できる製作手順である。田代・増田1993においては、奈具岡遺跡における管玉の製作技法について「手法Ⅰ」「手法Ⅱ」の２種類が示されている。これらは、荒割をしてから角柱体を製作する際にどのような手法をとるかで区別された。「手法Ⅰ」は「軟質の素材(緑色凝灰岩)を対象とする手法で、(中略)石核を施溝分割し板状剝片を作る。分割後に分割面をていねいに研磨して管玉直径に近い厚さまで板状剝片を調整し、最終の分割によって目的とする角柱体を連続的に得る手法」とあり、この特徴と提示された図と合わせて考えれば、いわゆる西川津技法(寺村1990)、大賀氏のＡ技法(大賀2001)に相当する。

「手法Ⅰ」に類似した管玉製作は、弥生時代前期末～中期前半の西川津遺跡や、中期前半の扇谷遺跡、甑谷在田遺跡などで見られる。いずれも軟質緑色凝灰岩を素材とする。奈具岡遺跡における硬質石材の管玉製作については別稿を用意しているが、奈具岡遺跡では同一遺構において軟質・硬質石材がともに見られ、素材により製作技法が異なっている(田代・増田1993)。つまり、奈具岡遺跡においても、基本的に軟質緑色凝灰岩は「手法Ⅰ」(西川津技法・Ａ技法)、碧玉・硬質緑色凝灰岩は「手法Ⅱ」(佐藤1970による大中の湖技法・大賀2001によるＢ技法にほぼ相当)が用いられ、素材と技法には強い関連が見られる。

ただ、軟質素材を用い板状素材を介在させるという管玉未成品の分割原理をもちながら、奈具岡遺跡では磨製石針を使用している点が注目される。甑谷在田遺跡では打製石針が出土し、西川津遺跡、扇谷遺跡では石針自体は不明であるが穿孔痕から打製石針の使用が推測されるなど、類例としては軟質緑色凝灰岩と打製石針の組み合わせが多い。こうした違いが生じたのは、奈具岡遺跡で玉作をしていたのが中期中葉であり、すでに磨製石針が採用されていた時期(田代2001)だったからであろう。さらに言えば、碧玉・硬質緑色凝灰岩による管玉製作も同時に行っていたことが影響していると考えられる。碧玉・硬質緑色凝灰岩製の細身の管玉製作に磨製石針を使用するという方法は、中期中葉には近畿地方から北陸地方にかけて広く採用されており、磨製石針を軟質素材においても使用したのが奈具岡遺跡の特徴と言える。奈具岡遺跡で製作される管玉は中期前半までの軟質緑色凝灰岩製管玉に比べ細身だが、これも磨製石針の採用により打製石針を使用するよりも孔径が小さくなり、管玉径も細くすることが可能となったからと考えられる。

３．異なる製作技法の使用例

なお、同一面に直交する施溝痕をもち直方体状に整形されたものや、板状にした面にではなく



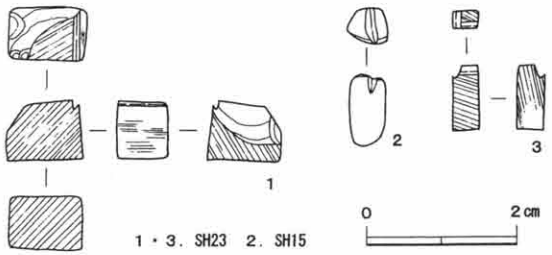
第３図　「手法Ⅱ」関連遺物実測図(1)

小口面に施溝痕が残るものなど、少数ながら「手法Ⅱ」を用いたと考えられる資料も存在する。No.869(第３図１)・1006(第３図２)・955(第４図２)・1492(第４図３)などがその好例である。

この技法は、通常碧玉や硬質緑色凝灰岩など、硬質石材に見られる製作技法である。奈具岡遺跡においても管玉製作には素材の特性に合わせた技法を選択している。その中で、ごく一部ではあるが、明らかに軟質緑色凝灰岩でありながら硬質素材に適した方法を用いた例があるのは興味深い。同一遺構において軟質・硬質石材を利用し管玉製作を行なっていることから、一部で技法が交錯したとしても不思議ではないが、硬質石材に「手法Ⅰ」を用いた例はなかった。軟質緑色凝灰岩に「手法Ⅱ」を用いることはできても、その逆は、石材の特性上うまくいかなかったのだろう。

４．その他の玉類(角玉)

ほとんどが管玉または管玉未成品のなかで、第４次調査において１点の角玉が報告されている。田代・増田1993の第33図69に掲載されている角玉(完成品)である (No.109)。軟質緑色凝灰岩製で、長さ7.5mm、幅6.7mm、厚さ5.8mmを計る。ＳＨ23から出土した。これに加え、再整理で新たに１点の角玉関連資料が確認された。第４図１(No.1153)は角玉未成品である。これもＳＨ23から出土した。直方体状を呈し、１面に施溝が残存しているが他５面は研磨されている。長さ10.1mm、幅7.7mm、厚さ6.9mmである。未穿孔である。



第４図　「手法Ⅱ」関連遺物実測図(2)

5．まとめ

奈具岡遺跡では第４次調査分を中心に多くの軟質緑色凝灰岩製管玉製作資料が出土した。資料の多いＳＨ15・23など、１つの遺構内の資料で荒割から完成までの手順がうかがわれる例もある。それによれば、板状素材の両面を研磨したのち両面から施溝をして分割するという、いわゆる西川津技法・Ａ技法に相当する方法で、管玉製作を行なっていたことがわかる（手法Ⅰ）。この技法は、中期前半までの例が多く、当遺跡の例は時期的にやや遅いが、いずれも素材が軟質緑色凝灰岩であるという共通点を考慮すれば、この技法は単に時期的に古い技法の残存というわけではなく、素材に適した技法として利用されたと見るべきだろう。この技法での管玉製作では打製石針の使用が想定されることが多いが、奈具岡遺跡で使用された石針が磨製石針であることは、同時期の玉作遺跡のあり方と一致している。大枠は西川津技法・Ａ技法であるが、時期や硬質素材での同時玉作という状況を反映して磨製石針を採用した点が、奈具岡遺跡の軟質緑色凝灰岩製管玉製作の特徴である。長さ6.6㎜、径2.7㎜前後の管玉を目指して製作していたようである。

また、軟質素材の管玉製作の一部に手法Ⅱが採用され、ごく少数ながら角玉も製作していたことも興味深い。

おわりに

本稿では、奈具岡遺跡の再整理資料のうち、第４次調査および第７・８次調査出土の軟質緑色凝灰岩製管玉とその未成品について簡単な報告を行った。今回は事実報告にとどまったが、碧玉・硬質緑色凝灰岩製管玉製作や穿孔具についての考察を行う過程で、奈具岡遺跡における玉作の特性を再考していきたいと思う。

（望月誠子）

【奈具岡遺跡玉作り関係遺物の活用状況】

奈具岡遺跡第４次調査は、平成４年８～10月まで行われた。出土遺物については、平成５年８月に当調査研究センターが主催した「第11回小さな展覧会・京都発掘‘93」で初公開後、翌６年に京都府立丹後郷土資料館「弥生の玉作り」展と加悦町はにわ資料館「古代丹後の世界Ⅰ」展で陳列された。また、平成８年には綾部市資料館「石」展に出品後、府立丹後郷土資料館「丹後王国の風景」展の網羅的展示の一角をなした。平成９年の文化庁主催の「発掘された日本列島・新発見考古速報展」を皮切りに、平成10年には、大阪府立弥生文化博物館「卑弥呼の宝石箱」展や富山県埋蔵文化財センター「石のアクセサリー」展で陳列される一方、東京都大田区郷土博物館「製作工程の考古学」展では生産遺跡ならではの展示が行われた。また、奈具岡遺跡の豊富な鉄製品が注目され、元興寺文化財研究所「いにしえの金工たち～古代金工技術の復原～」展に出展された。平成12年の福井県立博物館「よみがえるふくいのくらし」展、同14年の徳島市立考古資料館「ヒスイに魅せられて」展などへの出品と平行して、丹後の弥生遺跡の総括的な展覧会が開かれた。平成11年の府立丹後郷土資料館「丹後発掘」展、12年の滋賀県立安土城考古博物館「楽

付表　奈具岡遺跡出土軟質緑色凝灰岩製管玉関連資料

遺構	遺物番号	計測数	原石	1	2							3			3～4		4				5				6	残片（端部調整か）	残片（極小片）	手法Ⅱ？	手法Ⅱ	角玉未成品	角玉
				荒割	研磨なし	片面研磨	側研のみ	片研＋側研	両研	両研＋側研	全研	端研なし	端研あり	端部調整	端研なし	端研あり	端研なし	端研あり	全研	端部調整	穿孔中	穿孔中（半裁）	穿孔済	穿孔済（半裁）	完成品						
4次調査分																															
図版掲載分	48-110	35	1	10					13			4					3						3								1
SH02	865	1									1																				
SH06	866—870	5	1	1					2																				1		
SH07	871	1																											1		
SH10	872	1							1																						
SH11	873	1							1																						
SH14	813-814 874-938	67		4	4	1			9	10	2	2					6	3	5		1			1		2	15	2			
SH15	815-816 940-985	48	1	5	1	2		1	2	3		3	1		2		1	2	2		1					3	13	1	4		
SH20	986-1000	15		1					2	8			1														3				
SH21	939	1																									1				
SH22	817-819 1001-1019	22		1	2				1	3				2			2					2	1				6		2		
SH23	820-861 1020-1542	565	3	9	14	1	2	1	81	82	2	45	16	5	9	3	58	42	29	4	35	3	4	2	1	4	100	6	3	1	
T-1道状遺構	1543-1581	39		11	2				3	15		3					1										1	1	2		
SK01	1582-1583	2																									2				
SK06	1584	1																									1				
遺構不明	862-864 1585-1603	22						1	3	2							2	5	5		2				1				1		
4次合計		826	6	42	23	4	2	3	118	123	5	57	18	7	11	3	73	52	41	4	39	5	8	3	2	9	142	10	14	1	1
7・8次調査分																															
図版掲載分	500, 502	2															1				1										
SH01	889-895 1034-1036	10		2	2					2		1															3				
SH17	896	1	1																												
SH20	897, 1037	2													1												1				
SH34	1038-1041	4																									4				
SH39	1042	1																									1				
SH46	1043-1044	2																									2				
SH52	1045	1																									1				
SH53	898-899	2			1					1																					
SH56	900-902 1046-1049	7				1				1		1															4				
SH57	903-908 1050	7							1	1	1																4				
SH61	1051	1																									1				
SH64	909, 1052	2			1																						1				
谷部試掘	1053	1																									1				
南側畦Ⅰ	1054	1																									1				
遺構不明	910-916 1055-1056	9		2	2		1		1	1																	2				
7·8次合計		53	1	4	6	1	1	0	2	6	1	2	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	26	0	0	0	0
合計		879	7	46	29	5	3	3	120	129	6	59	18	7	12	3	74	52	41	4	40	5	8	3	2	9	168	10	14	1	1

片研……片面研磨
両研……両面研磨
側研……側面研磨
端研……端部研磨
全研……全面研磨

浪海中に倭人あり」展、14年の大宮町教育委員会「丹後王国展」などで、とりわけ同14年の大阪府立弥生文化博物館における「青いガラスの燦き」展は、まさに集大成と言うに相応しい展覧会であった。

重要文化財指定に先立つ総括整理は、平成15年11月から翌16年３月まで行った。その後、東京国立博物館での展示を経て、平成16年６月８日付けで重要文化財の指定を受けた。指定後の８月には、当センター「第21回小さな展覧会」で披露し、９月から府立丹後郷土資料館「人と技術」展で展示された。本年は、９月23日～10月23日に開催した、当センター設立25周年記念特別展「そして『王』になった。―京都・古代国家への道―」で、丹後地域での王権成立にいたる道のりの導入部で展示を行った。

（小山雅人）

（もちづき・せいこ＝川西市文化財資料館嘱託）

（こやま・まさと＝当センター調査第２課総括調査員）

注１　再整理は遺構ごとに細分された小袋から管玉および未成品を拾い上げていったため、管玉および未成品は基本的に1点ごと遺物番号を与えたが、チップや製作工程の判断ができないような小片については一括して遺物番号を与えているものもある。そのため、実際の資料点数はこれより多い。

注２　今回整理したNo.871がこれにあたる。

注３　このほかに谷部の試掘により出土した資料がある。

注４　点数が少ないためか施溝部分が残存する資料は少ない。しかし、板状の素材を作り両面を研磨して整形する資料は存在するため、第４次調査で出土した資料製作技法において同一と判断している。

参考文献

内田律雄・江川幸子ほか　1989『西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅴ(海崎地区３)　島根県教育委員会

大賀克彦　2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第４号

扇谷遺跡発掘調査団　1975『扇谷遺跡発掘調査報告書』　峰山町教育委員会

河野一隆・野島永　1997「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡　(1)奈具岡遺跡(第７・８次)」『京都府遺跡調査概報』第76冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

河野一隆・野島永　2003「弥生時代水晶製玉作の展開をめぐって」『京都府埋蔵文化財情報』第88号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

河村好光　1986「玉生産の生産と流通」『岩波講座　日本考古学』３　岩波書店

清水町教育委員会　2002『甑谷』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

増田孝彦・田代弘　1993「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)　(1)奈具岡遺跡(第４次)」『京都府遺跡調査概報』第55冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

寺村光晴　1997「林・藤島遺跡(泉田地区)出土の鉄製品―弥生時代後期の玉作り工具を中心に―」(『東日本における鉄器文化の受容と展開』第４回鉄器文化研究集会発表要旨集)　鉄器文化研究会

冨山正明　1990「タマの道―タマから見た弥生時代の日本海―」(『海と列島文化』第１巻　日本海と北国文化)　小学館

丹羽野裕　2004「松江市西川津遺跡における弥生時代管玉製作技術の再検討」(『古代出雲における玉作の研究』Ⅰ　島根県古代文化センター調査研究報告書22)　島根県古代文化センター

峰山町教育委員会　1988『扇谷遺跡発掘調査報告書』

2．上安久（かみあぐ）城跡

所 在 地　舞鶴市上安久

調査期間　平成17年５月18日～８月４日

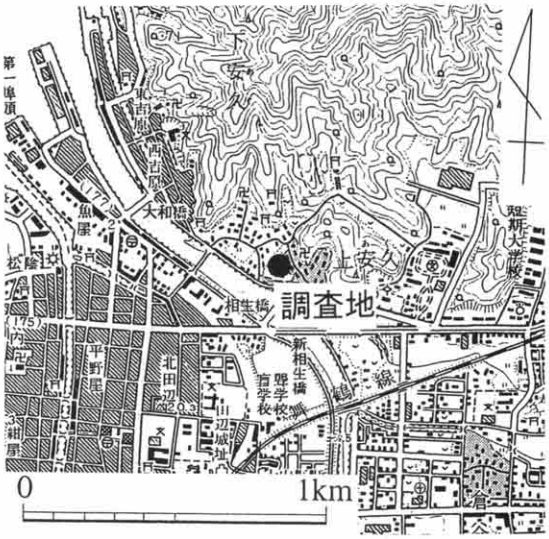
調査面積　約320㎡

はじめに　上安久城跡は、舞鶴市上安久に所在し、安久氏が中世に築造した城跡と伝えられている。西舞鶴市街の東方を流れる伊佐津川河口の東岸に位置し、城跡からは、田辺城跡を中心に発達した西舞鶴市街地を広く眺望することができる。今回、城跡の範囲内に臨港道路の建設が計画されたことから、京都府土木建築部の依頼を受けて、発掘調査を実施した。

調査概要　平成16年度の試掘調査で、曲輪が５か所以上残っていることが判明したため、今年度、調査を実施した（Ａ地点）。あわせて今回の調査地の東に位置する曲輪と推測される地点（Ｂ地点）についても調査を行った。

Ａ地点　試掘調査で確認した曲輪跡のうち、３か所（曲輪跡２・４・５）について調査を行った。城跡は標高約23ｍの最高所に東西約30ｍ、南北約15ｍの最も広い平坦面（曲輪１）が設けられ、そこから北、南に派生する尾根筋を利用して、北側には曲輪４・５、南側には曲輪２・３という具合に曲輪を配置していることが分かった。曲輪跡２・３は、試掘調査を行った地点を拡張した。伊佐津川に面する急斜面に土盛りをして曲輪を造成したものである。曲輪跡４は、自然地形を台形に削り出した高さ４ｍの曲輪跡で、築城時は幅約６ｍ前後の規模があったと考えられる。曲輪跡５は城跡に関する遺構を検出することはできなかったが、城跡で最も広い面積を占めているので、当時重要な場所であったと推測される。

Ｂ地点　調査Ａ地点の北側に上安久城本城と目される丘陵があり、この北斜面にテラス状の平坦面が造成されていた。この地点を調査したところ石組み遺構を検出した。石組み遺構は、上部構造と下部構造からなる。上部構造の石組の下部に方形の土坑があり、その中に円礫が認められた。土坑は、一辺が約２ｍの方形と推測されるが、上部構造は過去の開墾で一部が破壊されており正確な規模は分からない。下部構造である方形土坑内の円礫群は全体が残っていた。長楕円形に分布し、礫群の中とその周辺から遺



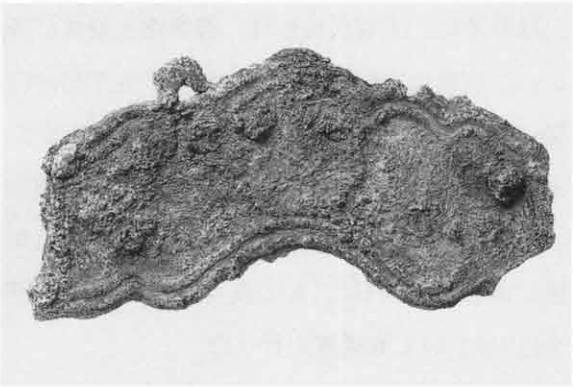
第１図　調査地位置図（国土地理院1/25,000舞鶴）

第２図　上安久城跡Ａ地点全景(北東から)

第３図　Ａ地点曲輪４検出状況(北から)

第４図　Ａ地点曲輪４の溝検出状況(西から)

第５図　Ｂ地点石組遺構検出状況(西から)



第６図　Ｂ地点石組遺構で検出した鉄磬

物が出土した。礫群の中央付近には、木質が付着した釘が分布していた。礫群を囲むように、南側に鉄磬(てっけい)、東側に短刀、西側に瓦器椀、北側に土師器皿が配置されていた。土師器の前には、炭と灰の広がりが認められた。瓦器椀は12世紀の終わり頃のものである。

まとめ　Ａ地点では曲輪跡の調査をしたが、後世の開墾などで削平を受けており、柵や建物などの施設の痕跡や当時の生活遺物は確認できなかった。しかし、城のために山を造成した跡が良好に残っており、城の構造を知る手がかりを得ることができた。Ｂ地点では、盛土を伴う石組み遺構の一部を検出した。下部に円礫で築いた小石室をもち、中央に木製容器が納められていたと考えられる。埋納の際に仏具を用いた儀式が行われているので、墳墓か経塚などの仏教関連遺構と考えるのが妥当であろう。出土土器の年代から、平安時代末期頃～鎌倉時代初頭頃に造営されたものと思われる。磬は、仏教行事に伴って僧侶が打ち鳴らす楽器であり、石製・銅製・鉄製品などが知られている。鉄製品は、伝世品と出土品をあわせても数少ないものであり、本例は、貴重な事例の追加となった。

（田代　弘）

3．園部城跡

所在地　船井郡園部町小桜町

調査期間　平成17年6月27日～8月23日

調査面積　約280㎡

はじめに　今回報告する調査は、平成15年度から実施している京都府立園部高等学校の、運動広場建設計画に伴う発掘調査の3年度目にあたる。

調査対象地にある園部城は、小出吉親により元和七(1621)年に建てられた近世城郭である。園部城は2重の堀をもち大規模な構築物であったが、櫓はなく園部陣屋として位置づけられる。

小出氏は、その後、寺社奉行や若年寄、京都所司代などの要職を勤めていたが、幕府の体制が危うくなり、京都の治安が悪くなってきた文久三(1863)年から慶応四(1868)年まで大規模な城の改築が行われ、念願の櫓を上げ名実ともに城になった。この改築は緊急時に天皇を迎えるためのものとも、宮城守護のためとも言われているが、明治5(1872)年には廃城になった。

現在、本丸跡は京都府立園部高等学校の敷地になっており、敷地内には幕末に作られた櫓門と巽櫓およびそれに取り付く城壁が残されて高校の施設として利用されている。

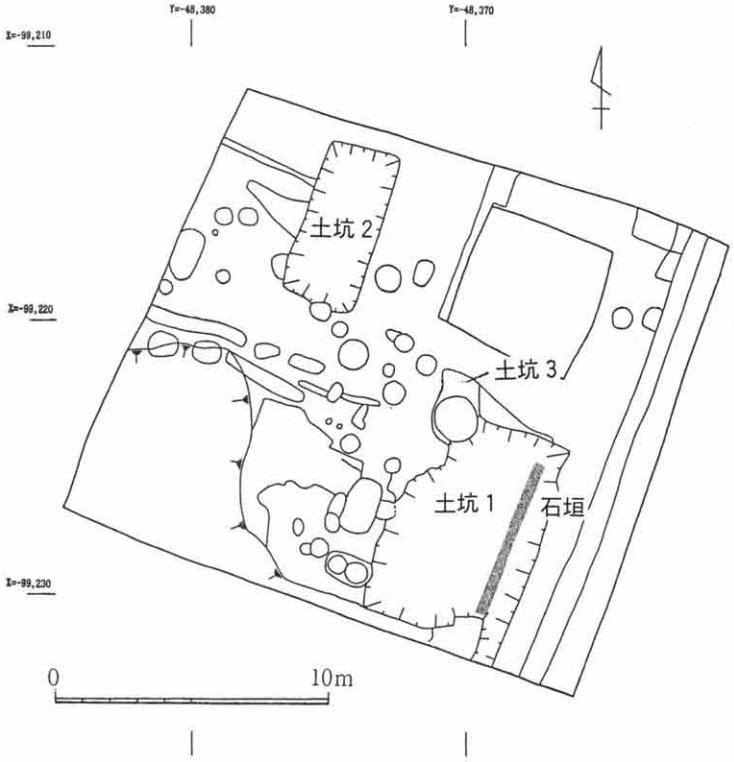
これまでの発掘調査では、本丸部分で石組みの溝や土坑などが検出されており、伊万里・唐津・備前・丹波・京都・美濃・瀬戸といった国内陶磁器のほか明代の青磁が出土している。

調査概要　今回の発掘調査地点は本丸部分と内堀で仕切られ、反対側を蓮池と呼ばれる堀状の池で仕切られた区画の一部を調査している。調査区内からは大小の土坑が検出することができた。建物にまとまるような柱穴などはないが、大形の土坑である土坑1からは2段に積まれた石垣が検出できた。以下で主要な遺構について説明したい。

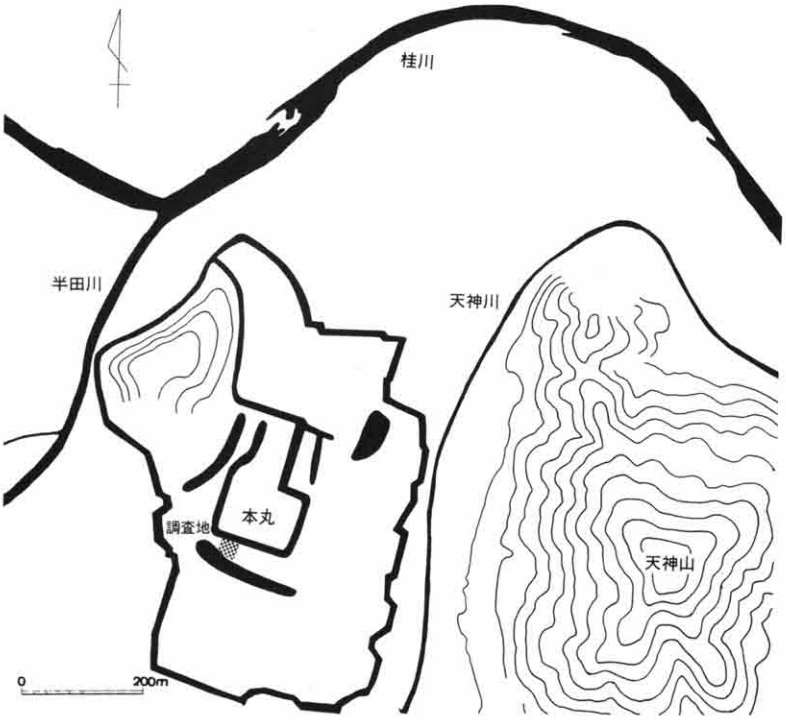
土坑1　南北7m、東西4m、深さ1.2mの規模をもつ大形の土坑である。埋土は検出面では非常に硬い堆積層があったが、その下部はしまりの悪い土が炭層を交え層状に堆積している。底部付近にはまとまって瓦が棄てられていた。火災によるごみを処分したと考えられる。遺物には、17世紀の伊万里・唐津・丹波・京都・美濃などの陶磁器が出土した。出土遺物から築城時に近い時代のものと考えられる。

土坑2　平面形が長方形を呈する土坑で、焼層土層を含む遺構である。出土遺物には大形の瓦や陶磁器類があるが、19世紀の遺物が大半で幕末の

第1図　調査地位置図(国土地理院1/50,000園部)



第２図　検出遺構平面図



第３図　園部城縄張りと調査地位置図

改築時、或いは廃城時の廃棄土坑と考えられる。

土坑３　平面形が直径1.5mの円形の土坑で、大形の礫が入っており、この土坑からは19世紀の陶磁器類が比較的多く出土した。

土坑の中には、土坑１の石垣の大きさと同じ程度の石が19世紀の遺構の中に含まれていることから、19世紀まで石垣をもつ建物などが存在していたことが分かる。

包含層からであるが、形象埴輪と須恵器の杯片と考えられる破片が出土した。

まとめ　今回の発掘調査では、初代城主小出吉親の築城時と近接した時期の遺構から多くの遺物が出土した。この遺物の組み合わせから丹波地域における陶磁器の利用状況が明らかになってくるものと期待される。また、これまでの調査で、埴輪をもつ方墳が本丸部分で検出されている。(注) 今回の調査で出土した埴輪は築城時に、その古墳または未知の古墳を破壊した排土を、今回発掘の郭部分に盛土利用した結果と考えられる。

（中川和哉）

注　引原茂治ほか「園部城跡」（『京都府遺跡調査概報』第４冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982、鵜島三寿「園部城跡第２次」（『京都府遺跡調査概報』第28冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1988

4．宮津城跡（みやづじょう）第12次

所 在 地　宮津市字鶴賀・馬場先

調査期間　平成17年7月5日～8月30日

調査面積　約480㎡

はじめに　この調査は、河川激甚災害対策特別緊急事業（大手川改修工事）に伴い、京都府土木建設部の依頼を受けて実施した。

宮津城は、現在の宮津市中心部を南から北に貫流し、宮津湾に注ぐ大手川河口部の東側、標高2m前後の低地に築かれた近世城郭である。宮津城は、天正八（1580）年に丹後に入った細川藤孝により築城されたが、慶長五（1600）年の関ヶ原の合戦で、西軍（大坂方）の丹後攻めにあって、藤孝は城を焼き払い一旦廃城となった。その後、丹後に入封した京極高広により宮津城が再建されたと推定されている。現存する絵図から、江戸時代前期（京極氏時代）から幕末（本庄氏時代）を通して、宮津城の縄張りはほとんど変化がないことが判明している。これまで、宮津城跡の調査は、宮津市教育委員会・京都府教育委員会・当調査研究センターにより計11次の調査が実施されており、今回が第12次調査となる。

今回の調査では、大手川河口部分の川幅を拡張するのにともない、宮津城跡の範囲に含まれる地点を中心にトレンチを設定した。

調査概要　調査地点は、宮津城南西隅付近に相当する宮津小学校校門の西側、大手川に架かる中橋のたもと（字鶴賀）から、馬場の跡に推定される、その南側一帯（字馬場先）である。中橋のたもとの民家跡地に南北2か所のトレンチ（1・2トレンチ）、その南方に1か所（3トレンチ）のトレンチを設定した。中橋のたもとの北（1トレンチ）で、江戸時代前期の土師器皿と陶器片が出土したほか、円形土坑を2基検出したが、いずれも遺存状況は悪く、時期の分かる遺物はなかった。中橋のたもとの南（2トレンチ）では、隅丸方形の土坑1基を検出し、江戸時代前期の土師器皿が出土した。また、砂層上面で古銭が出土した。この2つのトレンチでは、標高1～0.6m付近まで後世の客土があり、江戸時代の遺物包含層がほとんどみられない。また、大手川沿いに残る石垣には、宮津城期のものと推定される矢（楔）痕が残る花崗岩を認めるが、コ

第1図　調査地位置図（国土地理院1/25,000宮津）

第２図　弘化二年宮津城下絵図(宮津市史史料編第三巻付図を転載、加筆)

ンクリートで固定された場所が多く見られることから、後世の改築と推定される。３トレンチでは、砂層上面に濁暗灰色砂質土堆積しており、この堆積層から天目茶碗・青磁椀・すり鉢・鉄砲玉・古銭など出土した。いずれも16世紀代かそれ以前のものである。宮津城の時期には、生活した痕跡がほとんど認められない。

３か所のトレンチとも、大手川の水面と同一レベルかこれより低い地点から遺物が出土した。砂層は調査地点で検出高に差異があり、湧水の激しい場所がみられた。

まとめ　現在の中橋が宮津城絵図に描かれた位置と変わらないと仮定し、今回の調査地を弘化二(1845)年宮津城下絵図と比較したのが第２図である。この絵図には、中橋北詰に番屋が描かれているが、今回の調査ではこれに関連する遺構は確認できなかった。先に記したように、客土され、江戸時代の遺物包含層もほとんどなく、宮津城跡に関連する遺構は、わずかに残った土坑と遺物のみである。なお、中橋北詰の大手川沿いに、門扉の軸受け穴が穿たれた平石が立て置かれている。馬場先門(中橋門)から運ばれた可能性がある。宮津小学校の東には馬場先門の内側にあった、太鼓門が移築されている。

(石尾政信)

5．諸畑（もろはた）遺跡第４次

所 在 地　船井郡八木町諸畑小字松本

調査期間　平成17年５月13日～９月５日

調査面積　約750㎡

はじめに　諸畑遺跡の発掘調査は、府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」に伴い、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。諸畑遺跡は、平成６年度から平成８年度にかけて八木町教育委員会が実施した町内詳細遺跡分布調査によって発見された遺跡である。

今回の調査は、土地基盤整備事業に伴い、昨年度に引き続き、面的な発掘調査を実施した。

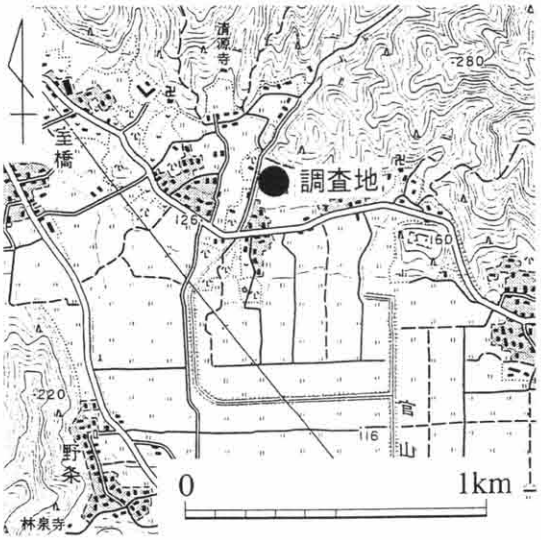
調査概要　今回は諸畑遺跡北西側に、２か所の調査区を設けた。昨年度この一帯をＡ地区と呼び、調査区をＡ-５トレンチまで設定したので、今年度は北側からＡ-６トレンチ、Ａ-７トレンチとした。また、各トレンチとも２面の遺構面を検出したため、上層の遺構面を第１遺構面、下層の遺構面を第２遺構面とした。

(1)第１遺構面

①Ａ-６トレンチ　古墳時代中期の竪穴式住居跡４基を検出した。竪穴式住居跡の大きさは一辺が５ｍ程で、深さは最大で50cmほど残っていた。住居跡の床面には住居の壁に沿って幅20cm、深さ５cmほどの溝が掘られ、さらに溝の中からは直径５～10cmの小さな柱跡が等間隔に並んでいるのが発見された。また、同じ場所で何度か立て直しを行っていることも分かった。これらの中で、竪穴式住居跡ＳＨ01と名付けた住居跡では、火災にあって焼失した痕跡が明瞭に残っていた。住居内の床や壁が被熱して赤変し、屋根を構成していた材木が炭化材となって残存していた。また、当時使われていた土器が、そのまま土圧で押し潰された状態で出土した。これらの土器の中には、初現期の須恵器・韓式系土器の可能性のある土器などが見られるほか、京都府北部（丹後・丹波）では最古の竈で、しかも類例の少ない石組みの竈が検出された。

また、竪穴式住居跡ＳＨ02ではＳＨ01とほぼ同じ時期の石組みの竈が作られており、住居内から滑石製勾玉が出土した。

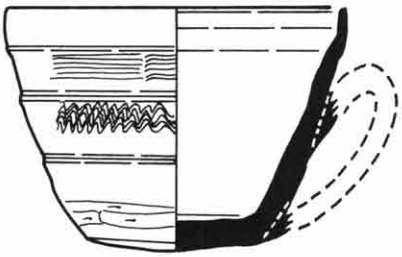
②Ａ-７トレンチ　古墳時代中期の竪穴式住居跡４基と、弥生時代後期の竪穴式住居跡１基を検出した。竪穴式住居跡の規模は一辺が５ｍ程で、深さは最大で50cmほど残っていた。



第１図　調査地位置図（国土地理院1/25,000殿田）

この中で、竪穴式住居跡ＳＨ07は一辺6.5ｍほ

どの大形の住居跡である。今回検出した住居跡の中では唯一弥生時代後期に建てられたもので、床面からほぼ完形の小形高杯が出土している。この住居は、当初円形住居として建てられたものが、四角い住居に建て替えられている。



第２図　竪穴式住居跡ＳＨ01出土
須恵器把手付椀実測図（Ｓ=1/2）

(2)第２遺構面

第２遺構面では各トレンチとも、円形・方形の土坑や柱穴・杭孔などを検出した。遺構面を覆う遺物包含層は弥生中期後半～後期にかけての遺物を含むが、遺構内からの遺物の出土はほとんどなかった。遺構内埋土は一様に炭化物粒を多く含んでおり、人工的に掘られたものであることは確実である。第２遺構面に相当する標高で、京都府教育委員会の試掘グリッド内で検出された柱穴内から、縄文土器片と思われる土器片が出土していることや、円形で深い土坑がいくつか見られることから、縄文時代の遺構である可能性も指摘できるが、確定できない。

まとめ　諸畑遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期と鎌倉時代を中心とする集落遺跡であるとされてきたが、古墳時代中期（５世紀）にも集落が形成されていることが判明した。特に、火災にあったと考えられる竪穴式住居跡ＳＨ01から見つかった初期須恵器や石組みの竈から、当時の最先端の品物をもち、最新式の調理施設を持つ人々が暮らしていたことが分かった。弥生時代から続く諸畑の村に、朝鮮半島から先進の技術を持った渡来人が移住して来て、このあたりの開墾に寄与した可能性も考えられる。

古墳時代中期の集落は、最終的には土石流の堆積によって埋め尽くされている。その後しばらくは集落は再建されなかったと考えられる。たびたびこの地を襲った土石流を嫌ってほかの土地へ移住した可能性が高い。この時期以降には南方の池上遺跡で集落が形成されているので、そちらに移住したことも考えられる。

また、弥生時代中期以前の遺構群が検出されたことで、諸畑遺跡がこれまで分かっていた弥生時代中期後葉以前から土地利用がなされていた可能性を示しており、昨年度に八木町教育委員会が行った大谷口遺跡の調査で検出された縄文時代の遺跡との関連が注目される。

（福島孝行）

6．長岡京跡右京第856次・友岡遺跡

所 在 地　長岡京市友岡西山16-1

調査期間　平成17年８月１日～10月12日

調査面積　430㎡

はじめに　この調査は、府道石見下海印寺線地方道路交付金(街路)事業に係わる事前調査として京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査対象地は、長岡京の条坊復原によると、長岡京右京七条三坊九・十町(新条坊では十一・十二町)にあたり、西三坊坊間小路と七条条間南小路が想定される位置にあたる。また、縄文時代から中世にかけての集落跡である友岡遺跡の範囲にも含まれ、過去の周辺での調査では、飛鳥～鎌倉時代にかけての遺構・遺物が多く見つかっている。

調査概要　調査地は、平成16年度に当調査研究センターが行った長岡京跡右京第829次調査のＡ・Ｂ地区の中間に位置する(Ａ-２・Ｂ-２地区)。また、昭和57年度に、(財)長岡京市埋文センターが実施した長岡京跡右京第118次調査が本調査地の中央部にある。今回の調査の結果では、これまでの調査と同様に、平安時代末～鎌倉時代の土坑、溝、柱穴などを検出した。

Ａ-２地区では、土坑４基と柱穴63基を検出し、土師器皿・須恵器・瓦器などが出土した。

Ｂ-２地区では、土坑３基と柱穴166基および溝２条を検出し、土師器、須恵器、瓦器、無釉陶器、緑釉陶器、中国製の青白磁・青磁・白磁などが出土した。

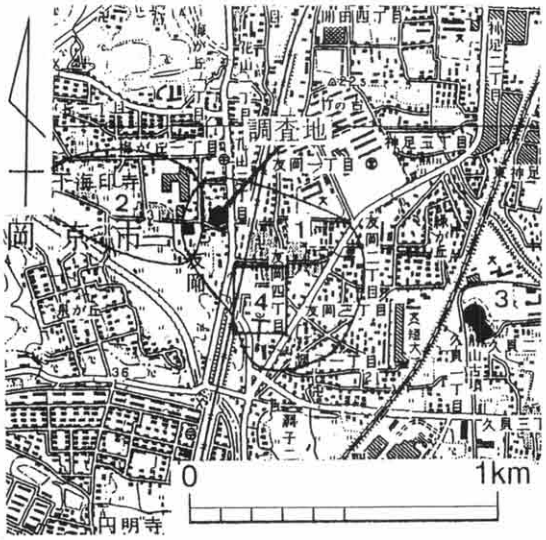
まとめ　今回の調査結果を簡単にまとめると以下のとおりである。

①　検出した土坑や柱穴からは、平安時代末～鎌倉時代にかけての遺物が出土した。この周辺部での調査結果でも、平安時代末～鎌倉時代にかけて遺構・遺物が多数検出されている。

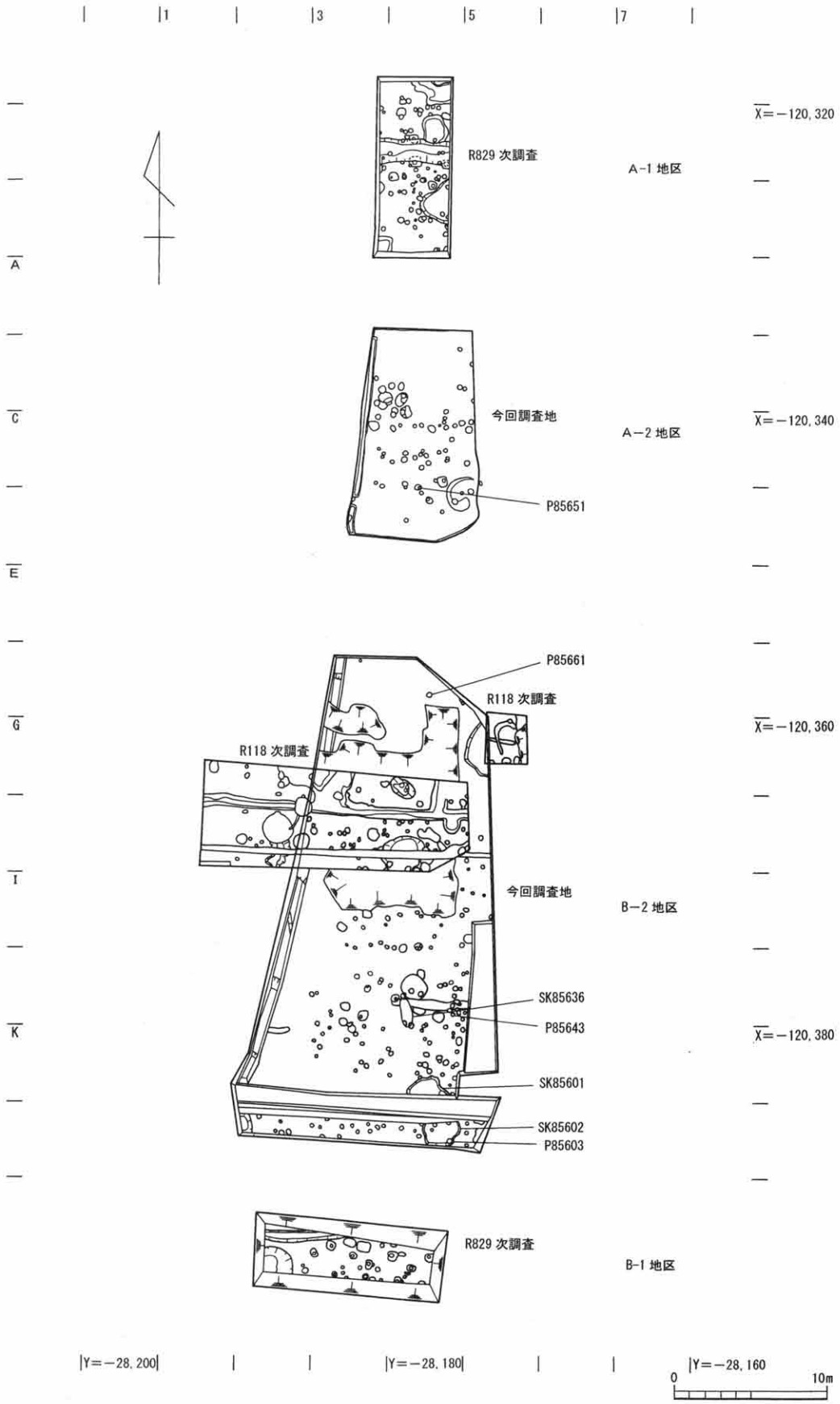
②　今回の調査地点は、長岡京の条坊復原では西三坊坊間小路と七条条間南小路が想定されていたが、調査の結果、関連する遺構の検出はできなかった。

③　隣接する周辺部での調査結果でも、長岡京期の遺構はあまり確認されていない。この附近における長岡京の造営状況については、今後の課題である。

(戸原和人)



第１図　調査地および周辺主要遺跡位置図
(国土地理院1/25,000京都西南部・淀)
１．友岡遺跡　２．伊賀寺遺跡
３．恵解山古墳　４．鞆岡廃寺



第２図　調査地位置図(座標値は日本測地系に拠る)

府内遺跡紹介

104. 湧田山（わくたやま）1号墳

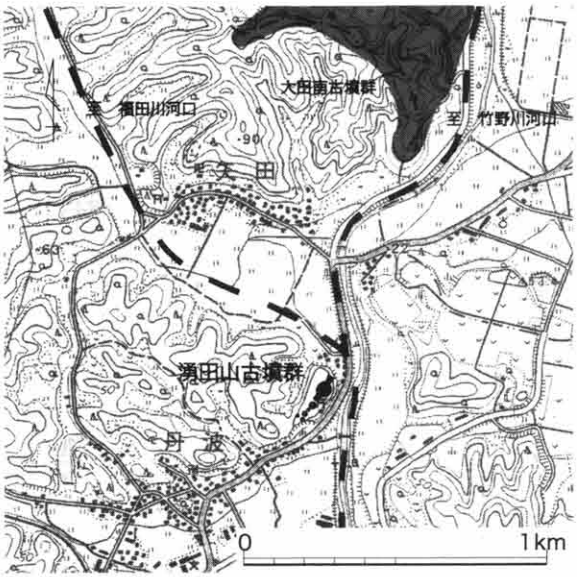
はじめに　今回紹介する遺跡は、湧田山1号墳である。古墳は、京都府京丹後市峰山町大字丹波・矢田に所在する。古墳の立地する丘陵は竹野川中流域西岸にあたり、ここは竹野川河口から中郡盆地に至る道程のなかでも狭隘部に相当している。この丘陵の北には、青龍三年銘鏡や、龍鈕画文帯神獣鏡が出土したことで知られる大田南5号墳、同2号墳の分布する丘陵がある。この地点を通ることにより、竹野川河口や、赤坂今井墳丘墓の存在する谷を抜けて福田川河口に抜けることも可能であり、交通の要衝に立地していることが特徴といえる。

湧田山古墳群は、同志社大学考古学研究会により、測量調査が実施されている以外は調査がなされていない。なお、同古墳を含む4基の古墳（湧田山1～4号墳）は、京都府史跡に指定されており、また、隣接する多久神社を含む1.76haは、京都府文化財環境保全地区に決定され、緑豊かな歴史的環境が保全されている。

古墳の概要　古墳は全長約100mを測る大形前方後円墳である。墳丘は、後円部は2段築成であるが前方部に段築はみられない。古墳の主軸は概ね南北にとり、前方部を北に向けている。したがって、平野部である竹野川流域には東側面を向けていることとなる。前方部先端部は崖面になっており、墳丘の流失が認められる。

この古墳の最大の特徴は未発達な前方部と長楕円形の後円部にある。後円部裾は完周せず、1段目の墳丘は南側の自然地形にいたる。また、現在のところ葺石・埴輪は確認されていない。

古墳の評価　埴輪は認められず、出土遺物も知られていないため、詳細な時期決定はなし難いものの、これまで、この古墳の編年的位置付けについてはさまざまな説が提唱されてきた。過去には中期古墳として黒部銚子山古墳に後出する古墳として位置づけられ、近年では古墳時代前期初頭まで遡らせる編年案が提示されている。中期古墳とする根拠は、丹後には古式の前方後円墳は存在しないという前提のなかで生み出され、黒部銚子山古墳に後出する首長墓が必要という消極的な理由から中期に位置づけられたようである。一方、古墳時代前期初頭まで遡るとする根拠は、周辺から大田南2号墳、同5号墳という前期初頭の墳墓が確認されたこと、長楕円形の後円部は、椿井大塚山古墳や、園部黒田古墳など古式前方後



第1図　遺跡の位置（国土地理院1/25,000峰山）

円墳に見られる墳形であること、短い前方部はホケノ山古墳などの纒向型前方後円墳に見られる点、現在丹後で確認されている最も古い前方後円墳である白米山古墳には葺石のみが存在し埴輪が存在しないため、白米山古墳よりさらに古い段階のものには埴輪がないと考えられる。などの理由からである。仮に湧田山１号墳が古墳時代前期初頭のものであれば、これまで、赤坂今井墳丘墓の成立から、大型前方後円墳へとつながる首長墓としての位置付けが可能となり、古墳時代前期初頭から前半にかけてのヤマトとの結びつきを積極的に評価できるといえる。

このように、詳細不明な古墳ながら、湧田山１号墳は古代丹後の空白期を埋める可能性をもつ重要な古墳であるといえる。今後、保存整備を含めた調査の進展に期待したい。

（石崎善久）

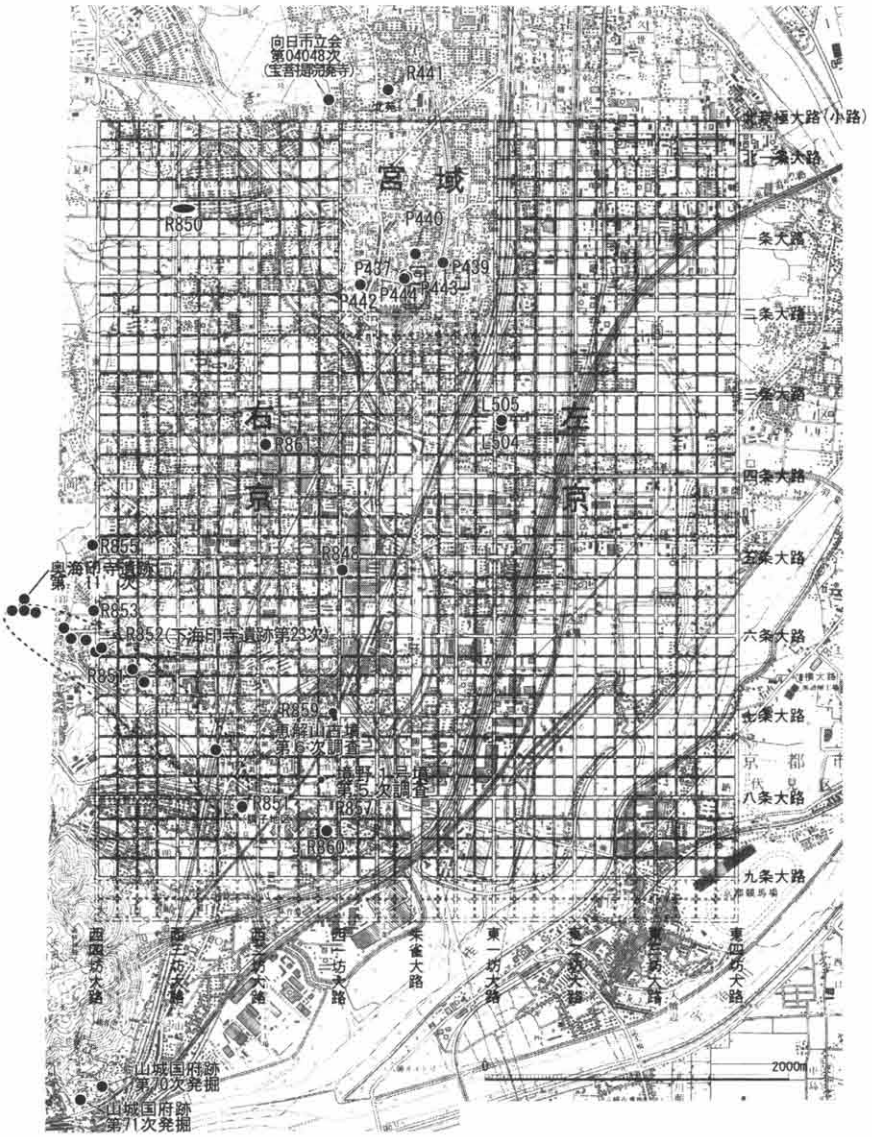
第２図　湧田山古墳群地形測量図
（『京都の文化財』第６集　京都府教育委員会　1988、を再トレース・一部改変）

長岡京跡調査だより・94

長岡京連絡協議会の平成17年４～９月の月例会では、宮内８件、左京域２件、右京域９件の調査が報告された。京域外の６件を併せると合計25件となる。

長岡京跡発掘調査抄報告

宮域　朝堂院の南面遮蔽施設の構造を確認する目的で実施された宮第437次調査では、長岡宮や条坊の施工実態に関連する重要な発見があった。すでにその所在が明らかな朝堂院南門の西に続く回廊について、その基壇北縁を巡る溝状の地覆石抜取痕が、大極殿の東西中軸線＝南門中軸線から西へ41.8m(約141尺)で、南に直角に折れること。そして、その西小口に凝灰岩切石による地覆石が原位置を留めた状態で確認されたことにより、回廊が途中で閉塞することが判明した。また、これより西側では、地山を削り出した基礎部分に版築土を載せた築地基壇が、北側雨落ち溝を伴って続いていく様子が明らかとなった。さらに、宮第443～445次調査によって、閉塞する回廊基壇の南側の調査が実施され、地覆石抜取痕および礎石の痕跡(根石)を伴う幅約９ｍの基壇の基礎部分が南に約20ｍ延伸すること。さらにその南端部において、柱筋の異なる総柱形式の礎石痕跡が確認されたことから、楼閣状の建物の存在が明らかとなった。これらの成果により、朝堂院区画が他の古代都城と異なって朝集殿(院)を南に付



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財調査事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図に加筆)　調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数次は次数を示す。

設せず、直接、二条大路に面するとされていた従来の前期長岡宮復原案に対し、宮城門としての「朱雀門」を開く南面大垣と、朝堂院南面回廊を兼ねた折衷様式として、後の平安宮宮城図などに示される東西二楼を備えた「応天門」翼廊形式を、宮城南門部分にいち早く取り入れて宮城南面を荘厳化し、その側面は築地大垣にて朝堂院を区画するという二重の構造を宮造営当初から採用していることが明らかとなった。また、出土した瓦類の多くは難波宮式であることから、長岡宮前期段階の延暦五(786)年には早くもこうした体裁を整えており、朝堂院南面官衙区画の存在や、後期宮城南方拡張論、条坊呼称の整理などに問題を投げかける結果となった。

右京域　京域の北西において、これまでに長岡京期の条坊側溝や築地を伴う居宅遺構が検出され注目を集めた一連の調査として、右京第850次の調査が始まった。一条大路南側溝および西三坊大路東側溝推定線に沿った柱列(2.7m等間)、有廂建物を含む掘立柱建物跡、井戸などが検出され、条坊施行と宅地利用を示す状況が明らかになりつつある。井戸は隅柱支持縦板組の側と曲物による水溜が残り、「□麻呂」と釈読できる長岡京期の土師器杯Aが出土している。

乙訓地域で最も規模の大きな前方後円墳である恵解山(いげのやま)古墳について、史跡整備の基礎情報を得る目的で、墳丘西縁から周濠にかけての確認調査が実施された(右京第859次)。昨年度に存在が明らかとなった西側の「造り出し」については、その北縁および墳丘への取り付き部の基底部に施された葺石が新たに検出され、張り出し部長9.7m、幅12mの長方形プランを示すことがわかった。また、墳丘取り付き部境界に形成される谷状の逆稜線部に沿って施行された石列が墳丘側に延びており、近年各地で類例が増えつつある、首長主導の水辺祭祀の再現遺構との関連で捉えうる資料となる。くびれ部に接する周濠内から円筒埴輪とともに家・蓋・盾・草摺形埴輪などの器財形埴輪がまとまって出土しており、石列上の壺(坩)形土製品とともに、造り出し部周辺における祭祀を象徴する埴輪組成を示している。南約330mに位置する古墳時代前期後半の前方後円墳である境野１号墳第５次調査(右京第857次)では、前方部東側の墳丘の構造を確認する調査が実施された。その結果、墳丘の東側において、一重の埴輪列を備えた幅１m前後のテラスを２面を設けた墳丘斜面が確認され、前方部の構造を知る重要な手掛かりが得られた。墳丘斜面には葺石が施され、裾には30cm大の石材を長軸で横積みする基底石が良好に遺存する。上下のテラスの標高差(約１m)や墳丘斜面長が小さいことから、検出された下段のテラス面は、家形埴輪がまとまって出土している点も含め、墳丘本体の段築とは別に、埴輪列をもつ別区(造り出し)の可能性もある。各段ともに埴輪の樹立に伴う掘形はなく、テラス上面の最終整形の際の盛土による化粧土が、埴輪基底の固定を兼ねていることが、西側くびれ部の埴輪列と同様に確認された。

京域外　京域の北郊に位置する中海道遺跡第64次調査では、物集女(もずめ)城造営期と併行年代の土塁や奈良時代の柱穴とともに、弥生時代後期の包含層の散漫な分布が確認された。土塁は西に接する調査区で検出されていた南北方向の堀を伴う土塁が東に折れた延長部で、２種類の土を交互に盛るといった、山科本願寺や物集女城などに見られる13世紀後半～15世紀の構築方法による。

(伊賀高弘)

第102回埋蔵文化財セミナー

第102回埋蔵文化財セミナー「**『王』出現前夜の京都―弥生社会の実像に迫る―**」を、本年８月６日(土)に、京都市内の京都社会福祉会館で開催した。

今回のセミナーは、当調査研究センターが設立25周年を迎えることを記念して開催したシンポジウム「そして『王』になった。―京都・古代国家への道―」の関連事業として実施した。

シンポジウムでは、弥生時代後期から古墳時代前・中期を中心に、府内各地域の「王」の出現をメインテーマに議論を進めて行くことになっていたため、これに先だって開催する第102回セミナーでは、その前段の時期にあたる、弥生文化の出現から、府内の特に丹後地域に大型の墳墓が出現する、弥生時代中期後葉までの京都の弥生社会の様相に焦点をあてることになった。

当日は、まず、府内での発掘調査の成果を踏まえ、弥生文化の各テーマに関する最新の研究内容を当センター職員２名により報告した後、弥生時代研究の第一人者である芦屋市教育委員会の森岡秀人氏に、弥生時代の京都について御講演をいただいた。森岡氏は講演のなかで、これまでの弥生時代について一環して描かれてきた社会像・歴史像を再検討し、「弥生時代の京都」についてもグローバルな視点から捉え直すことの必要性を説かれた。

各氏の報告後の討議では、弥生時代の中期から後期にかけての大きな変動について議論が集中した。特に、当時の東アジア情勢のなかで、日本海を通じた大陸・半島との玉や鉄の交易によって王権の成立に係わった丹後地域を含め、弥生時代において京都の地が果たした役割の重要性があらためて認識された。当日は悪天候にもかかわらず、63名の参加者を得て無事終了することができた。以下、各氏の報告内容の要旨のみ簡単に紹介しておきたい(文責辻本)。

「弥生時代の生活」　当調査研究センター主任調査員　中川和哉

最近の調査成果を踏まえ、京都における弥生文化を各テーマに沿って概観したい。府内では、京都市下鳥羽遺跡、長岡京市雲宮遺跡で弥生時代前期前葉の土器が出土しているが、本格的な集落が確認されるのは中葉以降からである。丹後では丘陵上に環濠をもつ集落が確認されている。山城地域では、中期になって集落の中心が移動し、また、大規模化する。集落内の祭りは、雲宮遺跡から孔を開けつるしたと考えられる豚の下顎骨が出土している。祭りに係わるものとしては、銅鐸とこれを模した土製品がある。丹後地域に特有のものとして陶塤がある。観音寺遺跡のセミ形土製品は、中国の葬送儀礼を思わせる。食物生産については、水田耕作以外に狩猟や採集が一定の割合で行われていた。土器生産に

中川和哉

ついて、前期の段階には、各地で比較的よく似た土器が作られる。土器に地域差が見られてくるのは中期中葉以降である。金属器は、向日市鶏冠井遺跡の中期前葉の溝から銅鐸鋳型が出土している。ちなみに銅剣を模した粘板岩製の銅剣形石剣は、山城地域、特に桂川東岸で多く発見される。京丹後市奈具岡遺跡では、玉作りに係わる鉄器が生産されている。鉄の素材は朝鮮半島経由で中国から運ばれたと思われる。丹後の鉄器の保有は、内容・量とも他に比べ勝っている。石器のうち、石剣に関しては、京都では打製のものに比べ磨製の占める割合が高い。産地に近いためか粘板岩が多く使われる。碧玉製の玉作りは、府内では比較的大きな集落で行われている。奈具岡遺跡は、専業的な集団によって玉作りが行われたと考えられている。府内の遺跡からは、戦闘行為に係わったと思われる死者の埋葬例が見つかっており、権力の統合過程で戦いがあったと考えられる。

「弥生時代の墓制」　当調査研究センター調査員　福島孝行

京都府内の弥生時代の墓制について、各地域の具体例を通して概観する。府内最古の方形周溝墓は、京田辺市稲葉遺跡で確認されている。単独で立地し、高墳丘である。方形周溝墓は平面形状から、周溝が全周する（A－a類）、一隅を陸橋状に掘り残す（A－b類）、「L」字状または直線状の溝を併用するB類、独立した直線の溝で区画するC類に分類される。稲葉例はA－a類である。丹波最古の池尻遺跡例はC類である。丹後ではこの時期、丘陵上に方形台状墓が造られる（京丹後市七尾遺跡）。府内では、区画墓の成立当初から、方形周溝墓制や方形台状墓制は、類似する部分をもちながら、実際の造墓活動においては、周溝の形態や墳丘の削出方法など、それぞれの地域で独自の方法を採用していることがわかる。中期では、大山崎町下植野遺跡で畿内の典型的な方形周溝墓が見られる。数基単独・散在から列状→碁盤目状に造墓されていく。埋葬主体部数と墳丘規模の大小には相関があり、多埋葬のものは総じて規模が大きい。主体部の配置にも一定の規格が認められる。中期の例として、南丹波では八木町池上遺跡、北丹波では舞鶴市志高遺跡、丹後では奈具墳墓群がある。池上遺跡で主体部裏込土の上に土器を置くのは、原三国時代の朝鮮半島の供献土器に類似する。各地域でのあり方の類似性と相違については、弥生時代社会体制の中で共有される約束事と、受け入れる側で柔軟に運用される要素があったことを推測させる。丹後では、中期後葉に、初現的な四隅突出型墳丘墓と類似する貼石方形墳丘墓が出現する。ただし後期には続かない。これらは集落内の階層化が進み、拠点集落の首長が山陰地域との墓制の共有を図った結果成立すると見られる。後期に墓制は大きな変化を迎える。特に山城地域では、従来の平地での方形周溝墓が継続する一方で、方形台状墓（京田辺市飯岡遺跡、木津町木津城山遺跡）や、近畿北部の三たん地域（丹後・

福島孝行

丹波・但馬)の独自性の強い墓制である卓状墓(京田辺市田辺城下層墓)が造られ、墓制の激変期の様相を呈する。南丹波でも墳形や副葬品に丹後・但馬地域の影響が見られる(園部町狭間墳墓群)。丹後では、鉄製品とガラス小玉などを多量に副葬する傾向が強くなり、卓状墓を案出する。さらに中国山地の方形台状墓が導入され、京丹後市古天王5号墓や方形墓への指向を強めた金谷型台状墓に展開していく。巨大な、京丹後市赤坂今井墳丘墓はこの延長上にある。すなわち「王」の誕生である。

「弥生時代の京都」　芦屋市教育委員会文化財担当主査　森岡秀人氏

本日の話のポイントとしては、弥生時代の実像を見直すことにある。これまで言われてきた弥生社会が、首長または王という権力者の成立を順調に用意できたのかを再検討したい。また、西日本を含めた広い範囲のなかで、弥生時代の京都はどのようであったのかを、本日の主題である王権の誕生を踏まえ話を進めていきたい。

弥生時代の年代は、年輪年代法などの進展とともに前進しつつも、従来の年代観との間で大きく揺れ動いている。始まりの時期が古くなっている。弥生時代のコア(核)となる時代〔真正の弥生時代〕を固定し、前後の時代との差違を比較していく作業が必要である。

近畿地方最古の弥生土器は、神戸市から播磨地方にかけての近畿の西辺で見つかる可能性が高く、神戸市本山遺跡で出土した甕形土器が今のところ最古と思われる。ＡＭＳ法炭素14の年代測定では、紀元前6世紀を下らないものとされるが、再検討が必要である。弥生時代の年代に関しては、京都府内の資料として木津町城山遺跡で後期前半段階の第Ｖ様式の土器を伴う獣帯鏡片が出土しており、後期の年代を考える上で重要な定点を与える。京都市大藪遺跡から見つかった後期中頃の掘立柱建物跡の木柱の年代は、年輪年代から紀元51年＋αの結果がでている。大藪遺跡に関しては、弥生中期末までの記念物的な大型建物とは、社会構造上、区別して捉えるべきものと思う。

次に、弥生時代において、古墳時代のような首長制社会があったのだろうかという疑問である。結論的に言うと、首長が権限や権力を握る社会は、弥生時代の後半期にまで下げて考える方が良いのでないか。当然、首長権力は、富の蓄積の中で生まれ継続されていくものであるが、その中でも富の余剰が大前提になる。一方で、灌漑農耕に伴う共同作業によって、技術や多量の労働力を駆使する差配者が首長権力を生み出すとする考えで、灌漑農耕が始まる早い段階に首長層が誕生するとする説がある。ここでは、首長の成長の中で古墳時代を迎え、大古墳を築くという順調な発展のイメージが浮かぶ。農業共同体・首長制は、連続的に存在するという前提が暗黙のうちにあるが、これは疑わしい。弥生社会の中

森岡秀人氏

では、順調に継続して行く部分と、断続する部分、つまり断層がいくつかある。この例に、後期初めの遺跡(集落)の大変革がある。山城地域ではⅣ期まで遺跡の数は順調に増えていくが、Ⅴ期の段階で急激に落ち込む。それに伴い、墓の数も住居とのバランスを失い急減する。播磨地域でも同様な結果を示し、近畿地方全体で同じ現象が見られる。大阪市内での方形周溝墓の例では後期前半に数が急減する。さらに、西日本でこの段階に断絶を示すものに土器の無文化や環濠集落、大型方形周溝墓の消失がある。北部九州では、大型甕棺墓が減少する。

弥生社会が、順調に発達して古墳時代に繋がるのであるなら、後期前半の時期にもう少し物的証拠が出てこなければならないが出てこない。弥生社会の中での質的な変換に関して見ていくことが必要である。銅鐸の埋納には、新しい銅鐸を一括埋納する大岩山型と、古い銅鐸群を一括埋納し、時にはほかの青銅器を一緒に埋納する桜ヶ丘型がある。京都府の梅ヶ畑銅鐸の例は後者である。銅鐸については、生産・使用・埋納地に場所を分けて分析する必要がある。梅ヶ畑銅鐸も遠隔地から運ばれて埋納された可能性がある。銅鐸の分布からは、新しい時期の銅鐸が近畿の外縁部に埋納されていくと言う印象を受けるが、銅鐸そのものも弥生社会のなかで用途や埋納のあり方に大きな変革が加わって来るものと考えられる。

京都の弥生中期を考える点で注目される遺物として、京都北部に見られる有樋式銅剣型石剣があげられる。これらは、凹線文土器の波及に伴って、磨製石器を使う祭器として加古川・由良川のルートを通じて北上したものと理解されている。丹後では後期に、琵琶湖沿岸部を通じた物の流入が見られ、東の地域との関わりが生まれてくる。このほか、京都では、特に丹後の弥生中期の墓に副葬される鉄剣の問題や、中期後半の玉生産など、畿内を中心とする瀬戸内海を経ない交流や物資の供給ルートが重要になってくる。

２～３世紀の社会を考える場合、『魏志倭人伝』に記された邪馬台国を中核にする国々のあり方は重要である。なかでも、考古学者がこれまであまり取り上げなかった「旁国」の存在はこの問題を考える上に重要な鍵となる。国々の統合に関しても、果たして統合のイメージで理解してよいか、再考を要する。東アジアの帝国である漢の影響を強く受ける北部九州と、近畿地方を中心とする社会には格差が生じており、両地域を一定の部族社会の中で律することはできない。

首長の概念はさまざまで、定義するのは難しいが、本日のテーマである古墳時代の「王」を生み出すような仕組みが弥生中期の後半には無く、後期前半から後半の間において、部族的社会のなかから首長制といったものが生み出されていくと考える。すなわち、弥生社会は、階段を踏むように、順調に古墳時代に駆け上っていく社会ではないことを理解し、そのうえでコア(真正の弥生時代)からも外れる弥生文化も見直されるべきものである。

(辻本和美)

備考　本事業は、平成17年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業国庫補助金によるものである。なお、本文中の山城、丹波、丹後の地名表記は律令期に設けられた国名であるが、ここでは京都府の地勢を表すのに都合がよいため便宜的に用いた。

設立25周年記念特別展

センター設立25周年記念特別展をふりかえって

はじめに　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(以下センター)は、昭和56年4月に業務を開始し、本年で設立25周年を迎えることになった。センターでは、設立から10年毎の節目の年に特別展を行って来たが、今回は四半世紀という節目の年にあたることから、これを記念して、平成17年9月23日(祝・金)～10月23日(日)までの延べ24日間、センターに隣接する向日市文化資料館を会場に、特別展「そして『王』になった。―京都・古代国家への道―」を開催した。

近年、府内では、京丹後市の赤坂今井墳丘墓をはじめとする弥生時代後期の巨大な墳丘墓や初源期の古墳の発掘調査相次いで行われ、古墳の出現から大規模な前方後円墳の築造にいたる様相が明らかになりつつある。今回の特別展では、これらの調査成果を踏まえ、弥生時代に出現した地域の有力者が、やがて古墳時代の『王』へと変貌をとげる時代の変化を、府内各地の遺跡や古墳の出土品の展示を通して広く府民の方々に理解していただき、あわせて埋蔵文化財の保護と活用を図ることを目的として実施した。

特別展について　特別展の展示に際しては、府内の各教育委員会のご協力を得て、貴重な資料を数多く借用することができた。展示品総数約200点のうち、重要文化財をはじめとして府・市指定文化財などの指定品が約半数を占め、充実した展示内容となった。今回は展示品が多数のため、向日市文化資料館の一階常設展示室の約半分とラウンジおよび二階研修室の3か所を展示会場に充て、ほぼ弥生時代中期～古墳時代中期にいたる各時代の「王の持ち物」の変化と各地域の特色を、「弥生『王』の出現」、「地域の『王』の台頭」、「そして『王』になった」、「大和政権の中の『王』」の各小テーマに沿って展示を行った。

特別展会場

特別展図録

今回の主な展示品としては、レプリカ7点を含む合計27面の銅鏡がある。このうち、「卑弥呼の鏡」として話題になり、重要文化財に指定された広峯15号墳出土の「景初四

年」銘鏡と大田南５号墳出土の「青龍三年」銘鏡の２面の鏡を並べて展示し、これらの鏡が出土した京都北部の丹後・丹波地域の古墳時代や中国との交流などについて関心を高めていただくようにした。

期間中は、多数の方々の参加を得て終了することができた(入館者数1,771名)。入館者に行ったアンケート調査の結果では、展示内容に関しては、概ね好評を得たものと思われる。また、参考にすべきご意見を多数いただいた。なお、展覧会期間中の10月８日(土)には、向日市民会館に於いて、特別展と同テーマで「記念シンポジウム」を開催した(参加者365名)。

会場風景(資料館１階常設展示室)

会場風景(ラウンジ)

会場風景(２階研修室)

おわりに　今回の特別展は、設立25周年記念事業の一環であり、実務にあたっては、センター内に検討委員会(展覧会部会)を設け、展示品や写真の借用、ポスター・チラシ・図録の作成、広報活動、展示など、開催に至るまでの一連の作業を各委員で共同して行った。はじめに構想した内容の通りには行かなかった面も多々あるが、反省点を踏まえ、今後の業務や普及啓発に活かしていきたい。

最後になりましたが、今回の特別展開催にあたり多大のご協力・ご援助をいただいた各教育委員会・関係機関の方々および京都府教育委員会(共催)、向日市教育委員会・向日市文化資料館(協賛)、向日市中央公民館に対しまして、職員一同より厚くお礼申し上げます。

なお、今回の特別展にあたっては、平成17年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業の国庫補助金を受けた。

(辻本和美)

センターの動向(05.08～10)

1．できごと

8．2　上安久城跡(舞鶴市)発掘調査終了(5.18～)

長岡京跡右京第856次・友岡遺跡(長岡京市)発掘調査開始

6　第102回埋蔵文化財セミナー(於：京都社会福祉会館)

8　平成17年度教育庁役付職員人権問題研修Ⅰ(於：京都市)安田正人総務課長、長谷川達調査第2課長、水谷壽克調査第1課課長補佐、奥村清一郎調査第2課課長補佐、松井忠春・竹原一彦、戸原和人、増田孝彦・田代弘・森島康雄主任調査員出席

12　平成17年度教育庁役付職員人権問題研修Ⅰ(於：京都市)小山雅人調査第2課総括調査員、小池寛調査第1係長、石井清司調査第3係長、辻本和美資料係長、田中彰・引原茂治・岩松保主任調査員、今村正寿総務課主任出席

18　園部城跡関係者説明会

19　園部城跡発掘調査終了(6.27～)

24　長岡京連絡協議会(於：当センター)

25　平成17年度教育庁役付職員人権問題研修Ⅱ(於：京都市)森下衛調査第1課長、杉江昌乃総務係長、伊野近富調査第2課次席総括調査員、中川和哉主任調査員出席

26　岡ノ遺跡第4次(福知山市)関係者説明会

30　諸畑遺跡第4次発掘調査終了(5.13～)

宮津城跡第12次(宮津市)発掘調査終了(7.5～)

9．5　諸畑遺跡第4次(八木町)発掘調査終了(5.13～)

7　人権大学講座(於：京都市)安田正人総務課長、長谷川達調査第2課長、小池寛調査第1係長出席

内田山古墳・内田山遺跡(第6次)(木津町)試掘調査終了(5.9～)

14　平成17年度教育庁役付職員人権問題研修Ⅲ(於：京都市)森下衛調査第1課長、小山雅人総括調査員、杉江昌乃総務係長、辻本和美資料係長、小池寛調査第1係長出席

19　田辺城跡(舞鶴市)発掘調査開始

23　当センター設立25周年記念特別展「そして『王』になった。―京都・古代国家への道―」開催(於：向日市文化資料館)(～10.23)

26　薪遺跡第7次(京田辺市)発掘調査開始

27　上人ヶ平5号墳(木津町)発掘調査開始

28　都出比呂志理事蔵垣内遺跡現地指導

長岡京連絡協議会(於：当センター)

10．1～2　京都府埋蔵文化財研究会(於：同志社大学)

4　上田正昭理事長蔵垣内遺跡現地指

導

4　長岡京跡右京第856次・友岡遺跡(長岡京市)関係者説明会

6　大垣・一の宮遺跡(宮津市)発掘調査開始

7　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋文研修会(於：奈良県文化会館)小山雅人調査第２課総括調査員、竹井治雄・岡崎研一専門調査員、伊賀高弘主査調査員出席

8　当センター設立25周年記念シンポジウム(於：向日市民会館、参加者353名)

12　長岡京跡右京第856次・友岡遺跡発掘調査終了(８．２～)

14　理事協議会(於：当センター)上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、増田耕造常務理事・事務局長、石野博信、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、上原真人、下田元美(代理山本参事)、宮野文穂、小池久各理事出席

17　史跡名勝笠置山(笠置城跡)(笠置町)発掘調査開始

18　案察使遺跡第７次(亀岡市)発掘調査開始

19　平成17年度教育庁役付職員人権問題研修Ⅲ(於：京都市)安田正人総務課長、長谷川達調査第２課長、水谷壽克調査第１課課長補佐、奥村清一郎調査第２課課長補佐、石井清司調査第３係長出席

人権大学講座(於：京都市)辻本和美資料係長、伊野近富次席総括調査員出席

20～21　全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：北九州市)杉江昌乃総務係長、今村正寿主任、黒坪一樹専門調査員出席

21　長岡京跡右京第852次・下海印寺遺跡第23次(長岡京市)発掘調査終了(６．８～)

23　当センター設立25周年記念特別展終了(9.23～)(参加者1,771名)

24　池尻遺跡第12次(亀岡市)発掘調査開始

野条遺跡(八木町)発掘調査開始

石野博信理事蔵垣内遺跡および内田山Ｂ１号墳現地指導

26　長岡京連絡協議会(於：当センター)

29　蔵垣内遺跡第４次(亀岡市)現地説明会

２．普及啓発事業

８．６　第102回埋蔵文化財セミナー(於：京都社会福祉会館)「『王』出現前夜の京都―弥生社会の実像に迫る―」：中川和哉当センター主任調査員「弥生時代の生活」、福島孝行当センター調査員「弥生時代の墓制」、森岡秀人芦屋市教育委員会文化財担当主査「弥生時代の京都」

10．８　当センター設立25周年記念シンポジウム(於：向日市民会館)「そして『王』になった。―京都・古代国家への道―」：第１部　都出比呂志大阪大学名誉教授・当センター理事「問題提起」

〈基調報告〉石崎善久当センター調

査員「弥生「王」の出現１―丹後―」、高野陽子当センター調査員「弥生「王」の出現２―丹波と山城―」、小池寛当センター調査第１係長「古墳時代の「王」」

第２部　原田三寿京都府教育庁文化財保護課技師「京都府北部出土鏡について」

〈講演〉野島永広島大学文学研究科助教授「王の富と権力―丹後地域の弥生後期の鉄器副葬について―」

石野博信徳島文理大学教授・当センター理事「邪馬台国時代　日本海のクニグニとヤマト」

当センター設立25周年記念シンポジウム
（上田正昭理事長のあいさつ）

シンポジウムの状況

【お詫びと訂正】前号第97号に以下の誤植がありましたのでお詫びして訂正いたします。

頁	場所	誤	正
7	上から６行目	『魏誌倭人伝』	『魏志倭人伝』

編集後記

前号でもお知らせしましたように、本年、当調査研究センターは設立25周年を迎えました。

今号では、設立25周年の記念事業の一環として開催しました、第102回埋蔵文化財セミナーと特別展について、その内容を簡単にご紹介しました。両催しとも、皆様方の暖かいご支援により無事終了することができました。この場を借りましてお礼申し上げます。このほかの事業につきましても機会があれば報告したいと考えております。

いよいよ冬本番、皆様にはお体を大切に、新しい年をお迎えください。

（編集担当＝辻本和美）

京都府埋蔵文化財情報 第98号

平成17年12月28日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社

〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER